

第1章

ニューギニア高地における 人生ゲームとしての階級間闘争

塩田 光喜

はじめに

私がニューギニア高地のインボン族の調査を始めたのは1985年のことであつた。当時、まだ健在であつた新石器時代に生まれ育つた老人達の多くはすでにみまかつてしまつた。そして、当時、青少年であつた者達が様々な生の軌跡を描いて、今日、社会の中核に座ろうとしている。その間にインボン社会の構造には一大地殻変動が生じた。それは一言にして約するなら、新石器的部族社会から資本主義的階級社会への変容（メタモルフォーゼ）である。かつての村の大人達は皆、家族を背に一家の長としての威厳を以つて、ガパウゲと呼ばれる集会場に集い、議論を闘わせ、演説合戦（オパンゲ）を行つていたものだつた。今日、ガパウゲは消失し、オパンゲは老人となつたかつての壮年の男達の間では闘わされているが、それはかつてのオパンゲが持つていた重みを失いつつある。そして、社会の主軸となつたかつての青少年の間には「勝ち組」と「負け組」への分裂が明確な姿をとつて現れつつある。新石器的部族社会が保障していた家長同士の基本的平等性が急速に崩れつつあるのである。それに代わつて、村レベルにまで浸透しつつある資本主義システムに乗つて、かつて白人達が占めていた地位に上昇する者とこの15年の間の人口爆発によって貧窮化する者達の間には社会的差異の刻印が深々と打

たれてしまったのである。本章は新石器的部族社会から資本主義的階級社会へとドラスティックに変動しつつあるニューギニア高地のインボング族の動態を人類学的フィールドワークに基づいて様々な人間の人生の軌跡をたどることによって、階級とは何か、それはいかにして、人間社会の中に出現してくるのかという問題を考察していこうとするものである。

第1節 本章の問題意識と方法論

これまで階級の問題は広く言えば、政治経済学（ポリティカル・エコノミー）、狭く言えばマルクス主義が主として取り組んできた問題であった。だが、ベルリンの壁崩壊以降の社会主義圏の崩壊と世界観としてのマルクス主義の失墜によって階級という概念もまた人文社会科学においては非本質的な概念に失墜してしまったように思われる。事実は20世紀末以来、階級分化は発展途上国のみならず先進国においても大きく進行しつつあるのだが、それはもはや「問題」とは見なされなくなったのである。

だが、フィールドワークで生の現実と直面せざるを得ない人類学者の目には、パプアニューギニアにおいて進行している階級分化はいやでも映じずにはおかない。

1999年、パプアニューギニアでの調査を終えた私は14年前に比べて不平等がひどく拡大したことに驚きと感慨を覚えて帰国の途についた。そして、その年の秋、私はパプアニューギニア研究の古参人類学者であるゲワーツとエリントン（Gewertz and Errington）が『パプアニューギニアにおける発生する階級』（*Emerging Class in Papua New Guinea*）という著作を出版したのを知り取り寄せた。そして、彼らもまたパプアニューギニアにおける階級の発生に重大な関心を抱き、それを何とか人類学的に記述・分析しようとしていることを知った。彼らの描いた東セピック州の州庁所在地ウィワック（Wewak）という町における中流階級と草の根（grassroots）という二大階級の分化と両

者の相互作用はフランスの社会学者ピエール・ブルデューの開発した階級意識に焦点を合わせた記述と分析が展開されていた。

私は彼らの問題意識の鋭さと記述の厚みに感心しながらも、彼らの議論には資本主義という階級形成要因に対する考察が手薄であると感じた。その結果、新石器の部族社会から資本主義的階級社会への転換というダイナミックな歴史的過程がスタティックな、もっと言うなら平板な二元論に縮退しているように思われたのである。

こうした問題意識を胸に、2000年、2001年とパプアニューギニア高地のインボング族を訪れる度に現地の変容の急激さに階級が形成されるということがいかなる事態を意味するのかということを読み知らされたのである。本章は現在進行中の階級形成の原初形態を政治経済学的なマクロの視点からでもなく、またブルデュー的静態的な視点からでもなく、現に生きて活動している諸個人のライフヒストリーとディスカールから描写しようという試みである。

第2節 インボング族の概観

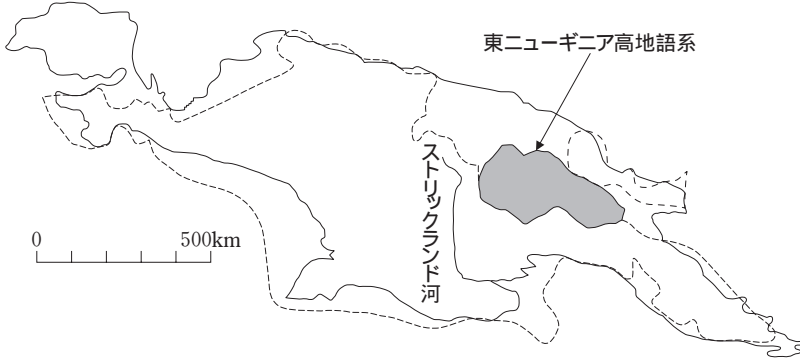
我々がこれからその文明史を祥さに見てゆこうとするインボング族について、地理的・民族学的概観をしておこう。詳細な記述の海の中で、読者が溺れないように。

まず、パプアニューギニアは世界第二の大島ニューギニア島（日本の総面積の約2.5倍）の東半分とその周辺島嶼からなる国である。パプアニューギニアは、大きくニューギニア高地、パプア（南部低地域）、モマセ地域（北部低地域）、島嶼地域に分かれるが、海拔1200メートルを超えるニューギニア高地地域には人口500万の内、約4割が集中する。ニューギニア高地は五つの州に分かれ、そのうち最大の面積と人口を有するのが南高地州である（National Statistical Office [2001: 9]）。この南高地州の北東端で西高地州に接

する一画に盤踞するのが、話者数約4万のインボング族である（National Statistical Office [2001: 17]）（図1～3）。

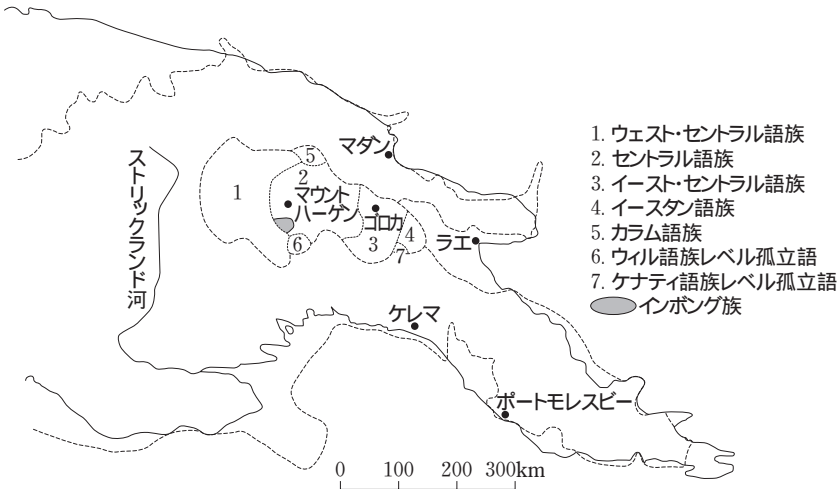
こうしたニューギニア高地への人口の集中はまず第一に、それ以上の高度

図1 トランスニューギニア語門とそこにおける東ニューギニア高地語系の位置



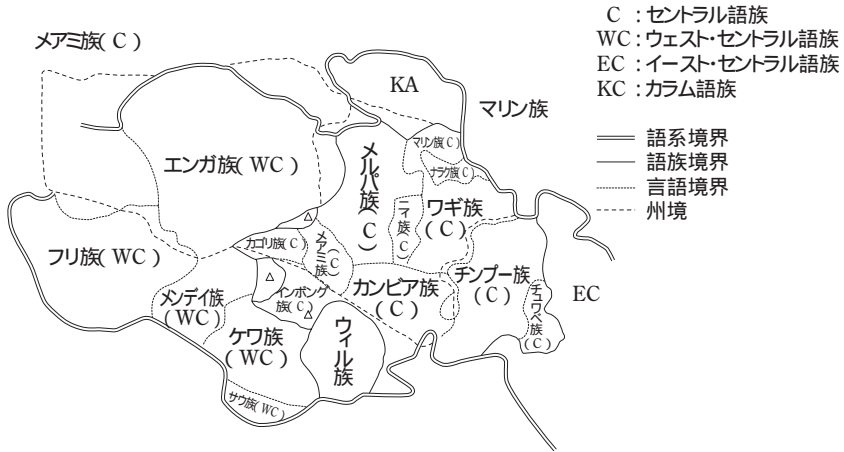
（出所） Wurm ed. [1975] により筆者作成。

図2 東ニューギニア高地語系とそれを構成する語族



（出所） Wurm ed. [1975] により筆者作成。

図3 インボング族周辺地域の言語分布



(出所) Wurm ed. [1978] により筆者作成。

ではマラリアを媒介するハマダラカ蚊が激減するからである。しかも、主食のサツマイモは霜害を除く気候の変動に強く、害虫や疾病にも強く、焼畑耕作で1ヘクタール30トンの収量を上げる（米の場合、水田耕作で1ヘクタール10トン）。この豊かな主食サツマイモは稠密な人口を養うに足るだけでなく、その余剰はニューギニア高地民の主要な財産形態である家畜のブタを飼育するに十分な量を賄うことができる。財産としてのブタの特徴はそれが生殖することと死ぬことにある。ニューギニア高地民はブタのその特性を活かして、日常食に供することなく、生きたブタの贈与交換とブタ屠りの儀式を村落共同体全体で催すことにより、共同体間の関係を創り上げていく。財産の周期的消滅を祭儀行為の根本的テーマの一つである、財の大規模な蕩尽に転化するわけである。

こうした人口稠密なニューギニア高地は峻険な山脈によって外部からの訪問者を許さず、1930年代初頭までは無人地帯であると考えられていた。だが、ついにニューギニア高地の世界からの孤立は1930年代初頭のゴールドラッシュによって破られることになる。金山師達が砂金をさがして川筋を遡りな

から急峻な傾斜を乗り越えて、ニューギニア高地に到達したのだった。その後引き続き、オーストラリア統治府の巡回統治官（パトロール・オフィサー）と宣教師達がそれぞれの任務を携えてニューギニア高地に入り込んできた。マウント・ハーゲンはその白人達の活動の拠点の一つであった。そこから、白人達は金採掘、統治、宣教といったそれぞれの使命を胸に四方に足を伸ばしていった。第二次世界大戦前にもレイ兄弟、ジム・テラーといった白人達がインボング族の地に足を踏み入れているが、激流カウゲル河（インボング語ではノ・カゴリ）がマウント・ハーゲンに定着していた白人達の南下を阻んだ。

第二次世界大戦、その後の復興期と続く10年間はニューギニア高地における白人達の未開地への探検・踏査活動は停止していた。

しかし、思わぬ所にニューギニア高地を訪ねようという白人が現れた。それはカリブ海のバハマ諸島で、西インド・バイブル・ミッションと名乗る小さな宣教会を率いていたG・T・バスティンという男で、彼はある雑誌に描かれていたニューギニア高地の記事を読み、「神の教えに未だ触れていないこの不幸な未開人に福音を宣べ伝えねばならぬ」という啓示を受け、早速、支持者から金を募ってオーストラリアへ飛び、オーストラリア政府から布教許可を得ると、ニューギニア高地の当時の統治長官となっていたジム・テラーからマウント・ハーゲンの南に広がる一帯の布教をアドヴァイスされ、ジム・テラーに巡回統治官をつけてもらい、マウント・ハーゲンの南のメアミ族を探索し、ついにパバラブルという名の地に布教の拠点を定めたのだった。バスティンはノ・カゴリと呼ばれるV字谷を切り裂いて流れる激流を越えて、更に南のインボングと呼ばれる土地へ赴いたが、その地はまだ白人統治が及ばず、村同士・氏族同士の戦争の真っ盛りであり、ほうほうの体でパバラブルへ引き返した。

インボングの地の風土的な戦争状態に終止符が打たれたのは1953～54年のこと、南高地県として行政区画が施され、インボング族もその東北端に含まれた時であった。

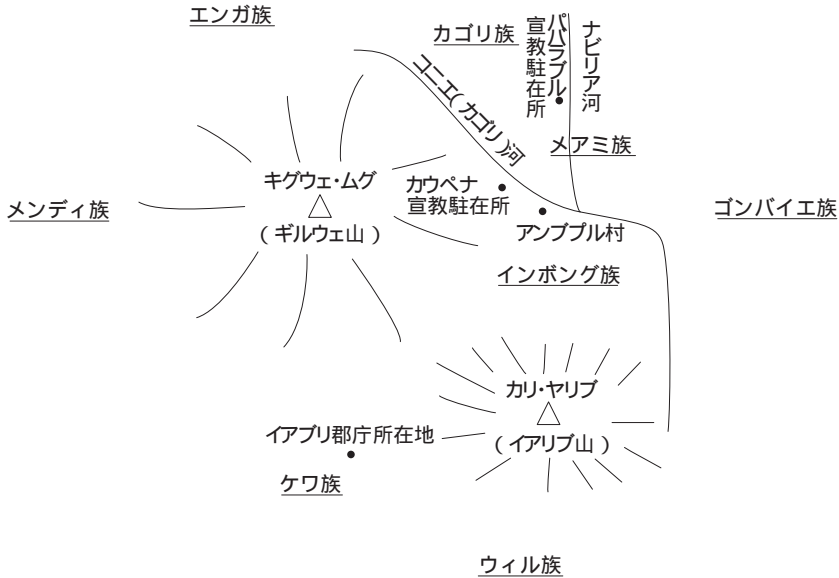
インボング族、ケワ族、ウィル族の地が境を接するイアリブという名の土地に巡回統治所が設けられ、そこからパプアニューギニア人警官を引き連れ、銃で武装した巡回統治官が戦争の報を聞くと、その場へ急行し、戦闘をしていた者達をイアリブの巡回統治所脇に掘った巨大な穴に投獄し、残った者の中から戦争を停止させる現地警察官を任命して、戦争の火を消していったのである。こうしてパックス・オーストラリアーナ（オーストラリアの平和）がインボングの地にももたらされて、インボング族の指導者達もこれ以後、戦争はタブーとし、トラブルはすべて賠償によって決着をつけるという取り決めを行った⁽¹⁾。この取り決めは今日に至るまで守り通され、インボングの地では殴り合いや石合戦は行われても、弓矢や斧（最近では銃）をとった戦争は行われていない。これはニューギニア高地では、きわめて稀有な例であり、他民族においては独立後、白人権力が去った後、部族戦争が続々と復活した中ではインボング族の平和の誓約は特異なものと言えよう。

こうしたインボング族の特異性は、インボング族が白人がもたらした近代文明に己の未来を託した結果であった。インボング族の特異性はそうして社会・政治的な面においてのみならず、地理的側面においても見出される。すでに述べたように、インボング族の居地は南高地州の東北端に位置するが、言語・文化系統から見れば、インボング族は東のメンディ族、南西のケワ族、南東のウィル族ら南高地州の隣接民族とは系統を異にし、カウゲル河の北の西高地州のメアミ族やカゴリ族と系統を共有するのである（図4参照）。

すなわち、行政的には南高地州に属しているが、言語-文化的には西高地州の語族に連なる、いわば飛び地なのである。この孤絶性がインボング族の民族的アイデンティティを強めることとなった。そして、インボング族の地が（若干のメンディ族の地を含むが）一つの選挙区として区画されたことも、インボング族の民族意識の形成を促す要因として作用した。こうした閉じた文化・社会・政治空間の中でインボング族は白人統治後の文明史の下で自己形成を行っていったのである。

ところで、インボング族の地を特徴付ける地理的要素は三つある。パプア

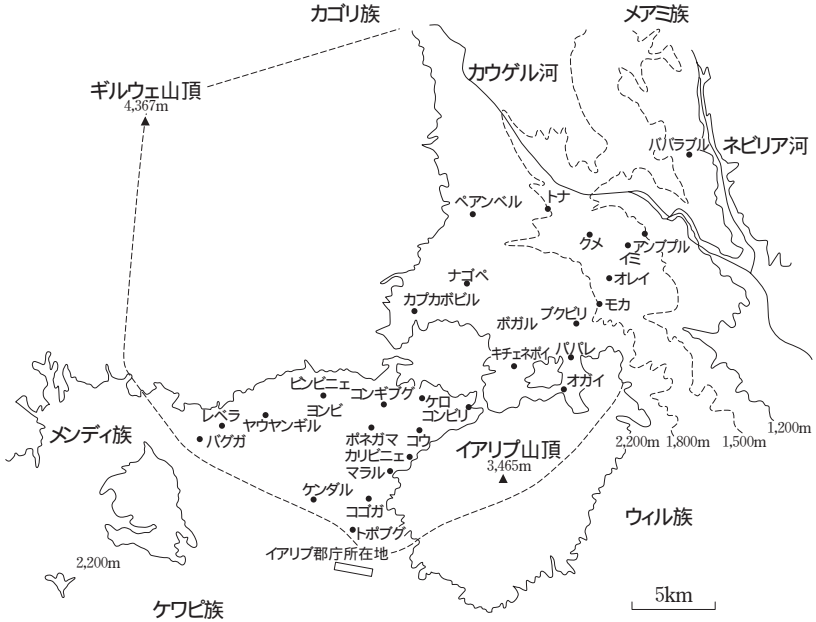
図4 インボング族と周辺民族



(出所) 筆者作成。

ニューギニア第二の高山（標高4367メートル）で、世界がそこから始まったと言われている聖山ギルウェ山（インボング語ではキグウェ・ムグ）、そしてギルウェ山の南東にそびえるこれも聖なる山と仰がれる標高3465メートルのイアリブ山（インボング語ではカリ・ヤリブ）、そしてインボング族の地の北辺を流れ、幅広くV字形に切り立ったカウゲル河（インボング語ではノ・カゴリ）である（図4および図5参照）。図5の点線とカウゲル河で囲まれた領域がインボング族のテリトリーである。等高線の内、1200メートル・ラインと2200メートル・ラインは実線で描いている。1200メートル・ラインは既に述べたように、マラリアを媒介するハマダラ蚊の猖獗がやむ高度、2200メートル・ラインは主食のサツマイモが育たず、それゆえ人間の居住地の限界を画す。すなわち、インボング族はこの二つの実線の間の高度の地に住んでいるのである。図で示されているように、ギルウェとイアリブ山の間を結ん

図5 インボング全図

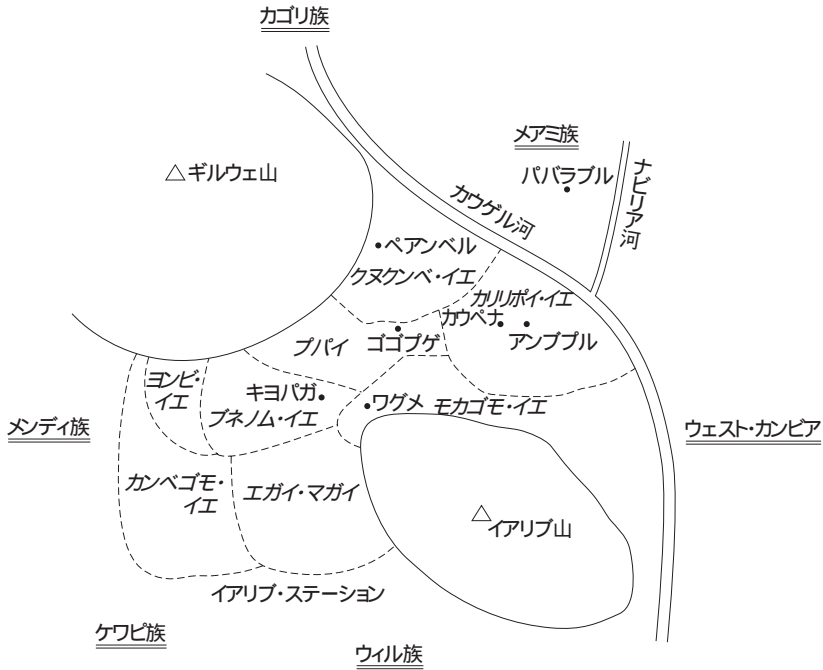


(出所) 筆者作成。

で海拔2200メートル以上のこぶ状の隆起があり、これがインボング族の地を二分している。こぶの北側は等高線がカウゲル河に向かって扇状に下っている。我々はこの部分を扇状傾斜地と呼ぼう。一方、こぶ状隆起の南側は等高線が見られない。こちらはイアリブ盆地と呼ばれる、フラットな土地の広がりである。この両者は植生を異にする。すなわち、扇状傾斜地では森林と人間の開拓地がミックスしているのに対し、イアリブ盆地は一面の草原が広がるのである。建材として木が用いられ、また燃料としても薪を必要とするインボング族は、それゆえ、イアリブ盆地の真ん中に居住地を構えることなく、ギルウェ山またはイアリブ山の森林限界線に村を構えるのである (図5)。

この扇状傾斜地とイアリブ盆地の区別は生態学的に外部観察者である私が立てたものであるが、インボング族自身はインボングの地を八つの地域=部

図6 インボング族の部族分布と周辺諸族



(注) 斜体文字は部族名。

(出所) 筆者作成。

族に分けている (図6参照)。地域=部族としたのはこれらが空間とともに人間の共同態を包含するものであるからである。例えば、アンブブル村の人間達はカリリポイ (イエ) 地域に住む者達であると同時に、カリリポイ・イエ部族を構成する村々の一つの村人達でもあるというように。

ただし、こうした地域=部族の連帯性とアイデンティティ意識は必ずしも強いものではなく、他地域=部族と対置された時、最も明確にその姿を現す。

インボング族において、政治的・軍事的な主権団体は村である。図5に名前とともに、点で記したのが村であるが (これらは代表的な村であって全ての村を尽くしているわけではない)、かつては数十人から二、三百人程度の規模であった村は今では医療と衛生の向上の結果 (とりわけ幼児死亡率の減少)、千

人を突破する村も出て来た。

先に述べたように、村は政治的・軍事的主権団体であり、主に村落間外交関係をめぐって意思決定をする単位であるが、土地の所有単位でもあって、土地の処分権は全体としての村に属する。村の土地は象徴的次元においては一つの氏族（インボン族においては氏族のような出自集団は父系である）、または氏族対（clan pair）のものと思念される。例えば、アンブル村では〈クリガイ〉〈ナウリガイ〉氏族対がマイ・プギエ（土地の主）であり、これら氏族対はアンブル村の創設神話を有し、これがそれらのマイ・プギエであることの根拠を成している。他にも、ペアンベル村は〈コレ〉〈ペライエ〉氏族対がマイ・プギエであるというように、氏族対がマイ・プギエであることが多いが、カウリエング村のように〈メルバアガイ〉氏族が、イミ村のように〈モンガイ〉氏族が単独でマイ・プギエになることもあり、更にナゴベ村のように氏族の分節である〈ナゴ・ブパイ〉支族がマイ・プギエになることもある。

このようにして、地縁集団としての村は表象レベルではマイ・プギエとなる氏族対・氏族・支族と等置されるが、村の現実の構成はより複雑である。例えば、アンブル村においてはマイ・プギエである〈クリガイ〉〈ナウリガイ〉の他に、約70年前に本貫の地を逐われて姻戚関係をたどってアンブル村に定着した〈ウィルモゴイ〉〈アペンダイ〉の氏族対があり、また〈クリガイ〉〈ナウリガイ〉も支族に下位分節し、それらがそれぞれの指導者（イエノミ）を持ち、対等の関係に立つ。〈クリガイ〉氏族は〈クリガイ・ゴロリ〉と〈クリガイ・マピング〉の両支族に分かれ、更に白人による村間戦争平定後、メンディ族の地に逐われていた〈マンディ・クリガイ〉支族がアンブル村に帰ってきて加わる。一方、〈ナウリガイ〉氏族は〈ナウリガイ・オガ〉と〈ナウリガイ・マイニエ〉の両支族に分かれる。これに〈ウィルモゴイ〉氏族と〈アペンダイ〉氏族が加わって、アンブル村は七つの氏族・支族によって構成される。これら分節は先にも述べたように、イエノミと呼ばれる指導者（ないしは代表者）を有し、こうした小分節のイエノミの中から村を

代表ないしは指導する村全体のイエノミが頭角を現わす。アンブル村においては1930年代から60年代までは〈ナウリガイ・マイニエ〉のトゥエポが村のイエノミであったし、トゥエポが老齢で引退してからは同じく〈ナウリガイ・マイニエ〉のタンピが村のイエノミとなり、タンピが1996年に邪術によって呪殺された後は、〈アベンダイ〉氏族のウィンディが中継ぎを務め、現在では村の村落政治評議員（村長とほぼ同義）〈アベンダイ〉氏族のカウンソル・クンピエが村のイエノミと見なされている。

このイエノミの交替を見ても、インボン族のイエノミが世襲的に引き継がれるものではなく、純粹に能力に基づいて決まってゆくことが読みとれよう。〈ナウリガイ・マイニエ〉のトゥエポやタンピはマイ・プギエ（土地の主）の氏族出身であったが、ウィンディやクンピエはアンブル村にとっては亡命氏族の出身である。このようなリーダーシップをめぐる能力第一主義がインボン族の男達のメンタリティーにしっかり根付いた競争的平等主義のエートスを生み出すのである。

それではイエノミであることの資格である能力とイエノミの獲得する機能とは一体いかなるものなのであろうか。

それはまず第一に財力である。財の形態はすでに述べたように家畜であるブタと過去においてはトゥミリと呼ばれる真珠母貝であったが、トゥミリは今日では貨幣によって代替されている。土地は父から息子達に継承されるが、土地が十分にあったかつては未開墾地を耕地に変えた者が土地の占有権・使用権を得ることができた（ただし、処分権は村全体、あるいはより正確に言えば家族を持った家長達の寄り合いによって決定される）。それゆえ、財を築き上げるためには土地は制約要因とはならなかった。財をどれだけ増やすことができるかを決定するのは、畑でイモを栽培し、ブタを飼育する妻の数であった。そうやって、妻達が育てたブタを婚資として、新たな妻を迎えるというサイクルで、多い者はペアンベル村の〈コレ〉ヤロなど20人近い妻を有した。こうした多妻者は妻の一族との贈与交換のパートナーとなることもでき、一石二鳥であったのである。この村を越えた贈与交換を行うことがイエノミた

ることの第一の条件だったのである。若い者達はイエノミや長老達が主催するマガリ（同盟氏族や敵氏族を同盟者に変えるために行うブタやトゥミリの贈与儀式。村と村の間で行われ、百頭前後のブタが贈与される）やブタ屠り（これは村のイエノミや長老達が自分の贈与交換のパートナーである他村の有力者に友誼の情を込めて屠って石蒸しにしたブタ肉を贈る儀式で、もらう方は実力者として認められ、誉れとなる）に参加してゆき、少しずつ名声と信望を勝ち得てゆくのである。そして、こうした村落間の外交関係を基盤に村にトラブルが発生した時、それを解決する能力を築き上げてゆくのである。

こうした外交的交渉能力のもう一つの要件が弁説の能力である。イエノミは村を代表して、他村落の人々の前で演説を堂々と展開する能力が必要とされるし、村の中でも本質的には平等な家長達が村の意思決定をめぐって集まる寄り合いの場で村の他の大人達を説得したり、反対者にはオバング（論戦）で斥ける必要が生ずる。ペリクレス時代のアテナイのように、指導者には公衆の前での巧みな弁説の能力が必須なのである。そのためには、インボング族の歴史を知悉し、人の心を惹きつけるレトリックを駆使できなければならず、人前でしゃべる態度・風格も備えていなければならない。こうした能力・知識を若者達は長老達が主催する贈与交換儀礼に参加しながら学んでいくのである。こうしたイエノミになるための競争がインボング族の男達の生活を支配し、人生というゲームを構成していたのである。

第3節 インボング政治史とインボング族高教育エリート の消長

インボング族が白人統治の下に置かれたのは、パプアニューギニアの700を超える諸民族の内でも最も遅い部類に属し、1953～54年にかけてのことであった。それゆえ、私がフィールドワークを始めた1985年にも未だ新石器的部族社会の中に生まれ落ち、人格形成を終え、一家を構え、村の中核成員で

あった老人達が生き残っていたのである。

白人達はイアリブと呼ばれる地に駐在所を置き、統治の中心地とした。白人統治官（パトロール・オフィサー）によるインボング族の鎮定（pacification）が終わり、インボング族の地に「オーストラリアの平和」（Pax Australiana）が確立されると、早速、宣教団がキリスト教の布教のため到来した。一つはカトリックのカプチン派教団で、これはイアリブに宣教所（ミッション・ステーション）を開いた。今一つは、すでに述べたように、エヴァンジェリカル・バイブル・ミッション（以後、バイブル・ミッションと略す）と名乗る、「ナザレ人の教会」というアメリカ南部の聖書原理主義教会から分裂した宣教団で、G・T・バステインというアメリカ人が長となって、1949年からインボング族の北のメアミ族の地で布教を始めていた。そして、部族戦争の鎮定とともに教線をインボング族にまで広げてきたのである。そして、宣教所をインボング族の北端に近いカウペナに置いて、滑走路を拓き、物資補給の態勢を整え、1959年には小学校を開設した。バイブル・ミッションは奇妙な宣教団だった。終末の切迫を説く一方で、子供達に米語を叩きこみ、アメリカナイズすることに熱い情熱を燃やしたのである。多くの子供達は教室という狭い空間に拘束され、訳のわからぬ言葉を一方的に押しつけられるのを嫌って小学校を飛び出したが、利発で従順な子供達は流暢な米語の使い手となり、1960年代の統治府のエリート養成のための中・高等教育のエスカレーターに乗り、新生パプアニューギニアのエリート予備軍となった。そうしたエリート予備軍第1世代の中にはグライミー・ワレナ、ウィワ・コロウイ、ピーター・ペプルといった少年達がいた。いずれも、第二次大戦直後に生まれた日本でいう団塊の世代に当たる。

その頃、インボング族の間に貨幣が流通を始め、バイブル・ミッションが小屋を建てて米、魚の缶詰、コンビーフ、衣類、斧、山刀などを並べるトレード・ストアを建てると、手に貨幣を握りしめたインボング族の男女達が彼らの欲望をかきたててやまないこれらの品を求めてカウペナに集まってきた。バイブル・チャーチはこうしてインボングの地を流れていた貨幣を吸い込み、

布教の資金としていった。一方、インボング族の者達はバイブル・ミッションのトレード・ストアの繁盛を見て、白人達の無際限とも思える富の秘密が解けたと思った。娘の婚資や先進地域のプランテーションに働きに出ている息子の持って帰った賃金を元手に、トレード・ストア建設熱が燃え上がった。1964年、3軒のトレード・ストアがバイブル・ミッションの店をまねて建てられた。商品の仕入れ先はバイブル・ミッションの店であった。1965年、インボングの店の数は3軒から12軒へと4倍増。ついに1971年にはトレード・ストアの数は215軒に達した。当時の人口は1万3000人だったから、人口65人に1軒の割合で店が建っていたことになる。これといった換金作物もないインボングの地で、これだけの店がひしめき合っているのは商品は売れるはずもない。事実、ほとんどすべての店の商品は棚ざらしという状態であった(塩田 [2000: 96-98] 参照)。その中でただ一人、ビジネスを軌道に乗せた男がいた。バイブル・スクールの優等生で寵児であったグライミー・ワレナであった。グライミーは小学校を出ると牧師となるべくキリスト教指導者養成所へ送られ、4年のトレーニングの後に、カウペナに帰ってきた。グライミーはインボング族最初の牧師となるとともに、バイブル・ミッションの資金とノウハウを得て、コーヒー園を拓き、自動車を買って運送業を始め、店も持ち、ニューギニア高地を東西に横断するハイランズ・ハイウェイが(といっても無舗装だったが)インボングの地に到達すると、ガソリン・スタンドを建てた。まだ20代半ばのグライミー青年は1970年にはインボング唯一の成功したビジネスマンとして頭角を現したのである。

翌々年には総選挙に打って出るが、さすがに時期尚早、前議員に敗北する。しかし、時代は急速に変化しつつあった。この選挙で独立派の議員が過半数を超え、国民連合政権を樹立し、オーストラリア政府もパプアニューギニア独立を1975年に設定し、そのための制度造りと制度運営に当たる人材養成に力を入れていった。そうした趨勢の中で、グライミーやウィワといった中・高等教育を受け、政府(ガヴマン)と地元の媒ちをできる人間達が村々の指導者達からも信任を受けてゆくようになる。事実、独立後、最初の総選挙で

インボング選挙区から当選したのはグライミー・ワレナ、南高地州選挙区から当選したのはウィワ・コロウィであった。二人とも未だ30代前半という若さであった。

当選したグライミー・ワレナはカウペナ宣教所の南隣のイミ村に、ニュージーランドからクリスチャン・カンパニーと称するビーチウッド製材所を誘致し、ギルウェ山南麓に自生する針葉樹の伐採・製材を行わせ、自らはその主要株主となる。2000年時点で、木材1立方メートル当たりの価格は1000米ドルを超える。まさに金のなる木である。これにより、グライミー・ワレナとバイブル・チャーチは安定した、しかも、巨大な富をもたらす源を確保することになった。

南高地州と西高地州の州境近くを流れるパウエンダ河に水力発電所を建設する計画が1971年、オーストラリア統治府によって立てられ、2万5000豪ドルという巨額の補償金がカウペナ宣教所の東隣のポネモンゴ村に支払われた。その上、ポネモンゴ村は毎年、相当金額の使用料を受けとることとなった。やがて、この金は1956年生まれのやはりカウペナ小学校、メンディ中学卒の後、南高地州政府の官吏となったトロンベナ・プルノがメンディ・ベーカーリーを興す時の資金となる。

独立時の1975年時点では、すでにカウペナ周辺のカリリポイ地域の村々にはコーヒー栽培が広まっており、各世帯は平均200～300キナ(6万～9万円)⁽¹⁾の現金収入が入っていた。南高地州政府はこの地域の更なる開発のために、カウペナ宣教所の南東隣のアンブル村のナウリガイ氏族とクリガイ氏族の所有するコロパンギの地2700エーカー(70.85ヘクタール)を750キナ(22万5000円)で入手した。ポネモンゴ村に支払われた賠償金と比べるとただ同然であることがわかる。こうして、州営コロパンギ・コーヒー・プランテーションが発足し、コーヒーの苗が植えられ、1985年には世銀からの借款で、ビーチウッド製材所脇にコーヒー精製工場も建てられるが、公営企業の常として経営責任の所在があいまいとなり、コーヒー・プランテーションは放置され、巨額の負債を世銀に負ってコーヒー精製工場もまた閉鎖される。

そうした内にも、1981年トロンベナ・ブルノは白人の助言を得て、メンディ・ベーカリーを設立、安価なスコーンをメンディの住民に供給し、ビジネスは成功を収める。自動車を買ったトロンベナはスコーン10個入りのビニール袋をインボングの村々のトレード・ストアに納めていくことで、売上高を順調に伸ばしていった。そして、1983年には西高地州の州都マウント・ハーゲンにアワ・ベーカリーを創設して事業を拡大した。マネージャーには弟のジョゼフ・ブルノを登用し、ポネモンゴ村の若い衆を従業員として付けた。

ポネモンゴ村はカウペナの地をバイブル・ミッションに譲渡して以来、バイブル・ミッションとは特別の関係にあった。バイブル・ミッションはポネモンゴ村の子供達に特別に目をかけ、ポネモンゴの子供達はカウペナ小学校を出ると、バイブル・ミッションの運営するパパラブルの中学校に送られ、そこで白人教師から英語や数学、それにキリスト教の教義、それにビジネスへの指向を叩きこまれるのであった。

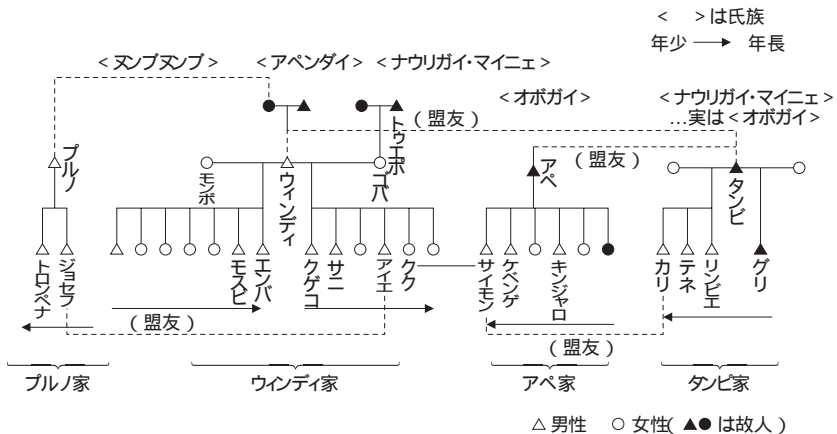
このバイブル・ミッションとの特別な関係がトロンベナのベーカリー・ビジネスの貴重な土台となった。マネージャーとして、ベーカリーを運営していく人材を多数得たのである。トロンベナはマウント・ハーゲンに次いで、エンガ州州庁所在地ワバグにはワネレモを送り込み、転じて、東高地州の州都ゴロカに弟ジョゼフを移し（アワ・ベーカリーはナタン・テマネの妻が受け持った）、更にハイランズ・ハイウェイの出発点でパプアニューギニア第一の産業都市ラエにはジョゼフ・パイニンを、そして姻族でジョゼフの無二の友人アイエ・ウェンディが首都ポート・モレスビーでベーカリー・ビジネスを成功させると、自らも一族のマーク・アンドイエをポート・モレスビーに送り込んでアワ・ベーカリーを設立させ、更にパプアニューギニアの北海岸のマダン州の州都にもベーカリーを開こうとしている。事業のマネージャー・クラスは英語を流暢にしゃべれ、他所の土地のパプアニューギニア人ビジネスマンや政府の役人、また白人やチャイニーズのビジネスマンと交渉でき、工場を監督し、出納を確実に管理できる能力のみならず、勤勉に日々

の務めを行い、収益を横領したりしないだけの誘惑を克服できる禁欲・克己の精神を持っていなければならない。新石器時代を出たばかりのインボン族の数百人の村人から、これだけの数のマネージャー・クラスの人材を生み出すことができたことは驚異的である。それはバイブル・ミッションのプロテスタンティズムと新石器的氏族紐帯の結合の成果である。

こうしてポネモンゴ村の〈イプグマイ〉〈ヌブヌブ〉氏族対はパウエンダ水力発電所の補償金をバイブル・チャーチのアメリカ式ビジネスに生かし、ベーカリー・チェーンをパプアニューギニアの主要都市に張り巡らせ、インボン随一の豊かな氏族対となった。そして、その総帥であるトロンベナ・プルノは後に失墜するグライミー・ワレナを凌いでインボン族のビジネスマンとなり、ミスター・Tと人々から称えられ、自らはポート・モレスビーの一等地に屋敷を構え、ポーカー・マシンにそのあり余る富を散じながら自適の生活を送っている。

このように、バイブル・ミッションに新時代の到来とそこでの成功を早くから見て取った男の一人に〈アベンダイ〉氏族のウィンディという男がいた。

図7 主要登場人物系譜・盟友図（2000年現在）



(出所) 筆者作成。

〈アペンダイ〉氏族の本貫の地はブネノムイエ地域のキヨバガという村であったが、キヨバガで邪術をめぐって内紛が起こった際、ウィンディの父を含む〈アペンダイ〉氏族の分枝は姻戚であるアンブル村に移っていたのであるが、バイブル・チャーチの白人の到来とともに、ウィンディは逸早く白人との結び付きを求め、母の氏族〈ヌブヌブ〉の地ポネモンゴに移住したのだった。弁説に長けたウィンディは当時、カリリポイ地域随一の実力者であり、1930年代以来、アンブル村のイエノミとして不動の名声を確認していた〈ナウリガイ〉トゥエポの長女ゴバをめとり、二人の娘をもうけるが、二人ともカウベナ小学校に送りこみ、長女のアゲレは小学校を卒業後、看護学校に進み、次女のククはトロソベナ同様、メンディ中学に進学した。男子を得たいと願ったウィンディはクヌクンベ地域の〈コーレ〉〈ペライエ〉の女、モンボを第二夫人にすると、望み通り、第一夫人のゴバからはアイエ、第二夫人のモンボからはエンバの二人の男の子を同年に得た。二人ともカウベナ小学校に通い、小学校で教えていたG・T・バステインの娘レニタに愛でられ、優秀な成績で卒業した。だが、一家から二人同時に中学校に進むことはできないという政府の方針で、エンバがイアリブ中学に進み、アイエは村でしばらくブラブラした後、パバラブルのバイブル・チャーチの経営する中学校へ進んだ。こうして、上の4人はポネモンゴ村で成長したが、1975年ウィンディの家は何者かによって放火され、全焼する。すでにアンブルのイエノミの地位から引退していたウィンディの舅トゥエポはウィンディ一家をアンブル村に呼び返し、その保有する広大な土地をウィンディに譲った。ウィンディはトゥエポの跡をついでアンブル村のイエノミとなっていたタンビの副官として、その優れた弁説と知恵でタンビを補佐することとなった。

一方、タンビは1974年、第一家に呪いをかけたとかどでギルウェ山麓の故地ゴゴブゲから追放された〈オボガイ〉氏族のアベ老人に土地を与え、住まわせた。アベも白人到来直後から未来は白人との関係を結ぶことによるのみ開かれると見て取り、白人統治官の片腕となり、警官として威をインボング中に振った男である。〈オボガイ〉氏族はもともとの本貫の地はコ

ロバンギ村にあったが、戦争に敗れ、ある分枝はゴゴブゲに、ある分枝はカウゲル河を越えてウェスト・カンビアのゴミにと離散したと言われている。そして、実はタンビの属する〈ナウリガイ・マイニエ〉支族はこの〈オポガイ〉氏族のうち、アンブル村にとどまった一分枝だと内密に語られていたのである。〈ナウリガイ〉は共にアンブル村の土地の主（マイ・ブギエ）を成しながら、潜在的敵対関係にある〈クリガイ〉氏族がかつて内紛で村を離れて移り住んでいた〈マンディ・クリガイ〉を呼び寄せて、アンボイヤンダという土地に定着させたことに危機感を感じ、自氏族の勢力を拮抗させるために、こうして係累を持つ男達（しかも、戦士や指導者となりうる男子を持っていることが望ましい）を集めていたのである。

アペにはサイモンという長男がいた。サイモンは祖母の手で育てられ、その聡明さでイアリブのカプチン派の小学校を最優秀の成績で卒業し、当時タリ中学に学んでいた。タンビはサイモンの内にアンブル村の将来を託すに足る人物を見出し、サイモンが学期休暇で村に帰ってくる度に、己が家に留めて、インボング社会で人々を率いてゆくにはいかなる人間でなければならないか、演説合戦（オバング）で勝ちを収めるにはいかなる知識とレトリックの体系が必要かを縷々述べ伝えていったのである。こうしてサイモンはインボングの伝統的な知の体系と近代的知の体系を併せ持つ少年として成長していった。彼はタリ中学をも図抜けた成績で卒業し、マダン国立高校へ進学していった。当時、パプアニューギニア全土に国立高校は4校しかなく、そこへ進学できるのはエリート中のエリートに限られていた。だが、サイモンの不幸は彼が遅れてきた世代だということだった。1960年生まれのサイモンがマダン国立高校を卒業した時、政府の枢要なポジションは第二次世界大戦直後に生まれた文明化第1世代により、すでに占有されていた。たとえば、カウペナ小学校第一期生のウィワ・コロウィはゴロカの教員養成大学を卒業すると、教職には進まず、外務省に入省し、独立と同時にEC（ヨーロッパ共同体）の大使に任命された。ウィワはその2年後の総選挙で州選出議員として国会議員となり、翌年には厚生大臣の座を手にした。サイモンは未だマダ

ン国立高校生である。そして、サイモンがマダン国立高校を卒業した時、彼に割り当てられたポジションは西高地州の衛生官というきわめてつつまじやかな地位であった。しかも彼の上には彼より15年～5年早く生まれたエリート候補生達がびっしりと高位の職を占めていた。サイモンが昇進するためにはこれら未だ20代後半から30代前半の若きエリート候補生達がリタイヤするまで待たねばならない。そのためにはたっぷり20年は待たねばならなかった。しかも、そうして得られる職は州政府の部長クラスである。能力と自信と野心に燃えるサイモンにとってはあまりに惨めな未来図であった。マウント・ハーゲンにあって悶々とするサイモンは父のアベとトゥエポの長女でウィンディの第一夫人ゴパの勧めに応じて、ゴパの次女ククと結婚する。ウィンディは一族の者がアベに呪殺されたと思いこんでいたので反対するが、トゥエポとタンビというアンブル村の二代にわたるイエノミの強い意向には従わざるを得ず、二人の結婚は行われた。だが、アベは婚資に3頭のブタと300キナ(9万円)しか払わなかった。中等教育を受けた、女性としては当時は稀な教育歴を持つククには30頭のブタと3000キナ(90万円)が相応の婚資であった(塩田 [2000: 101])。このことはアベ家とウィンディ家の間に後々までしこりを残すことになる。とまれ、ククは2人の息子フレッドとレックスを産み、マウント・ハーゲンでの生活を送るが、新婚の二人の家はくり返し、強盗に襲われ、怒りの積もったサイモンは州政府に辞表を出し、アンブルへ戻ると大学進学手続きをして、1985年パプアニューギニア大学に入学した。

同じ頃、やはり能力と自信と野心を燃やしている若者がいた。ギルウェ南麓の村ペアンベル出身のピラ・ニンギである。白人到来の直後1956～57年に生まれたピラも抜群に優れた頭脳の持ち主で、ペアンベルのバイブル・スクールの小学校を卒業すると、イアリブ中学に進み、更に国立高校を出ると、そのままパプアニューギニア大学に進んだ。ウィワ世代のエリートの独立化の大風を受けて急上昇した姿を間近に見ていたピラは大学生の身で、1982年の独立後第2回の総選挙にグライミー・ワレナを相手に回して挑戦した。ピラの地盤はギルウェ南麓のクヌクンベ地域、その後ろ盾は10人以上の妻を持

ち、20人以上の子供を持つクヌクンベ地域第一の指導者〈コレ〉ヤロであった。人民進歩党のグライミーに対抗し、パンゲー党からの指名を受けたピラは遊説中に「パンゲー党が政権を取ったら、魚の缶詰の値段を下げます」と公約した時、聴衆のイエノミの一人から「ほう、パンゲーが缶詰工場を持つとは初耳だわい」とオパングを挑まれ、切り返すことができず、この話が広まると、まだあの若造はインボング全体の利益代表者である国会議員にするのは早いという合意がイエノミ達の間生まれ、ヤロも手を引いて一敗地に塗れた。オパングに長けていることはインボングの指導者となるためのかくも肝要な条件なのである。ピラは大学を中退し、西高地州からやはり大学生の身でパンゲー党候補として立候補し、こちらは当選を果たしたパイアス・ウィンティの秘書となって、再度政界進出の機を窺うこととなる。

パイアス・ウィンティはパンゲー党の党首マイケル・ソマレに見込まれ、パンゲー党の副党首に抜擢され、大臣の職も与えられるが、首相ソマレとの関係はやがて疎遠になり、マヌス州選出の女性議員ナハウ・ルーニーらとともにパンゲー党の左翼分派を形成し、ソマレが後継者に東ニューブリテン島出身でパプアニューギニア大学第1期卒業生のラビー・ナマリユーを指名すると、党を割って人民民主運動という政党を結成し、人民進歩党党首で1968年以來、ニューアイルランド州選挙区から連続当選を果たし、1979年から1982年まで首相を務めたこともあるベテラン政治家ジュリアス・チャンに担がれて、連立を組み、パンゲー党から政権を奪って首相となる。ウィンティの片腕としてピラは中央政界に足がかりを得たのだった。

一方、ピラの挑戦を斥けたグライミー・ワレナも人民進歩党から2期連続当選の実績を買われて自治大臣に任命され、宿願を果たすこととなった。ビーチウッド製材所からの潤沢な資金とバイブル・チャーチの暗黙の支持に加え、大臣の地位を得たことはグライミーの政治的な地歩を不動のものとしたかに見えた。そして、グライミーは1987年総選挙に向けて村々のイエノミ達や地域政治評議員といった伝統的实力者をポート・モレスビーの大臣公邸に招いて、ポート・モレスビーを見物させ、土産を与えて、選挙準備を着々と整え

つつあった。

こうしたグライミーの圧倒的優勢が崩れるきっかけとなったのは、まさに彼の資金源であるビーチウッド製材所であった。

アンブル村はビーチウッド製材所の職員宿舎用に土地を売却していたが、その価格が余りに低かったことに若い衆が気づき、1987年1月、土地を返却するよう要求し、ビーチウッド製材所に侵入した。その先頭に立って、製材所の白人マネージャーと交渉したのが、クリスマス休暇でアンブル村に帰っていたサイモン・アベだった。だが、交渉は決裂し、サイモンはアンブル村を代表してビーチウッドの大株主のグライミー・ワレナのもとに陳情に赴く。そのサイモンを待っていたのは「顔を洗って出直してこい。この猿め!」という侮蔑の言葉だった(塩田 [2000: 102])。憤然と席を立ったサイモンは「猿に何ができるかお見せしよう」と捨て台詞を残してその場を立ち去った。

サイモンの復讐が始まった。サイモンはタリ中学時代に親交のあったメンディ族のビジネスマン、アンソニー・テモにインボンゴ票はまとめるからインボンゴ選挙区から立つようにと慫慂した。サイモンの後ろにはカリリポイ地域一帯で最も影響力あるアンブルのイエノミのタンビの姿があった。タンビは以前から、グライミーの懐柔を断固として斥けてきたのだった。こうして、タンビの絶大な影響力を背景に、自らの弟達、ウィンディ兄弟、タンビの息子達を始めとするアンブルの若者達をまとめて、テモのトラックを使い、楽器を使った派手な選挙キャンペーンを行うと共に、アンブル村にインボンゴ中のイエノミ達を呼んで、盛大なブタ屠りの儀を、テモの村では米、魚の缶詰、コーラなどの大分配を行った。

グライミーも勿論、選挙キャンペーンを行ったが、グライミー陣営にはテモ陣営の熱気と団結が欠けていた。そして、グライミーの地盤であるモカゴモイエ第一の実力者、ワグメ村のイエノミ、〈モゴイ〉オガイエは娘をタンビの長男に嫁している、白人到来以前からの友にして、同盟者だった。この自身の地盤を固めることができなくなったことがグライミーの優位を大きく揺る

がすことになった。サイモンの情熱と統率力、タンビの隠然たる影響力、テモの財力が固く結合したテモ陣営は現職の利を生かし切れなかったグライミー陣営を僅差で打ち破った。グライミーは侮りから生まれた軽率な一言によって、没落の道をたどることとなったのである。

怒ったグライミー支持者達は斧や山刀を振るってサイモンやウィンディ家を襲撃した。サイモンとサイモン支持の若い衆は村の墓地に立てこもり、代わる代わるライフルを肩に不寝番をして一夜をすごした。翌朝、テモはトラックをアンブル村に送りつけると、サイモンを乗せ、マウント・ハーゲンのカガムガ空港へ向かった。グライミー支持者達もトラックを調達して後を追ったが、サイモンは車窓からライフルを構え、寄せつけなかった。

無事、ポート・モレスビーへ逃げのびたサイモンは初当選のテモが運輸大臣に就任すると、事務次官に任命された。サイモンは帰化白人実業家ロバート・サクリングのデスコの上手にアパートを借りると、サクリングと親交を深めていった。そして、共に選挙を戦った村の若い衆をポート・モレスビーに呼んで職業訓練校へと送り込んだ。

運輸大臣に就任したテモとサイモンはアンブルの上手にある分村リペノムからペアンベルへ通ずる車道の建設（リペノム・ロードワーク）に着手する。これは地元への公共事業の誘致であるとともに、現場監督にグライミー・ワレナ支持派だった〈ナウリガイ〉ムギエと〈クリガイ〉ピムエを指名したように明々白々たるグライミー・ワレナ派の懐柔・切り崩し工作であった。そして、タンビの次男テネはアンブルにビアホールを構え、リペノム・ロードワークに雇われて、金を手にした男達を集め、瞬く間に村一番の大金持ちとなった。

テモ・サイモン組は更に西高地州のトゴパから、インボングの地ワグメまでのハイランズ・ハイウェイの拡大と舗装に着手した。これは西高地州のメアミ族の地と南高地州のインボング族の地の数十の村を貫く大工事であった。この工事にも地元住民達が雇われ、人夫として雇われるとともに、拡張した道路脇の住民には補償金がバラまかれ、トゴパからワグメまでのハイウェイ

沿いの村々は時ならぬブームに沸いた。工事を請け負ったシンガポールの企業、長成はコロバンギに従業員宿舎を建て、数十人の従業員は毎夜のごとく、テネのビアホールに押しかけ、テネのビジネスは栄えに栄えた。隣接して建つテネの兄カリの店も順調に売り上げを伸ばし、タンビー家は伝統的富であるブタのみならず、貨幣経済においてもアンブプル随一の長者となった。

こうして、テモの支持基盤を固めたサイモンも自らビジネスに乗り出した。ロバート・サクリングのコネクションで、オーストラリアの古着商と渡りをつけ、オーストラリア製の良質な古着を売る店をポート・モレスビーのバディリ地区に開いたのであった。それは古い倉庫を改装した巨大な古着のスーパー・マーケットであった。資金はテモの保証で開発銀行から借り入れた。従業員は選挙以来の団結を誇るアンブプル村の若い衆である。というのも、人口の約30%が失業者でそのうち40%が犯罪で生計を営んでいると言われるポート・モレスビーにおいては、ビジネスはラスカルと呼ばれるギャングの好餌であるからだ（塩田 [2002: 10]）。おまけに、サイモンには政治上の宿敵がいる。商品や売り上げを守るため、ビジネスマンはギャング達からの自衛を迫られる。サイモンは選挙以来、自分に従っている村の若い衆を店の自身の家族の寝室の周りに銃器をもって寝起きさせ、自らは警護役のタンビーの三男リンビエを連れて、ある夜はあるホテルに、別の夜は別のホテルに、更に別の夜は家族とともに自宅にと居所をつかまれぬよう移動した。私はこの組織を前著で「ビジネス武士団」と呼んだ。

サイモンの古着ビジネスはポート・モレスビー 15万人の潜在的需要を爆発的に喚起した。それまで、ポート・モレスビーの中下層民はチャイニーズの売る安物の中国製化繊を買っていたのだが、今やそれよりも安価で良質な衣料を手に入れられるようになったのだ。1990年の開店とともに、店はポート・モレスビー市民で溢れかえり、翌年にはゲレフ地区にも新たに2店を開店し、更にはラエとラバウルに出店するなど瞬く間にビジネスは膨張した。

サイモンは対外交渉に当たり、店のマネージメントはラエ工科専門学校で会計学を修め、マウント・ハーゲンのダンロップで会計係として働いた経験

を持つ妻ククの弟アイエに委ねた。

そうして、1992年となった。インボングの村々に公共工事で雇用と補償金をバラまいていたテモ・サイモン組にとって、もはやグライミー・ワレナは敵ではなかった。テモはグライミーを今度は大差で破るが、ここでサイモンは致命的な愚行を犯す。選挙キャンペーン中に〈クリガイ〉ゴアイエの娘と懇ろになり、1万キナ（200万円）と20頭のブタを〈クリガイ〉氏族に与えて第二夫人とした。これにそれまでサイモンの浮気と自分に加えられる暴力に苦しんできたククが堪忍袋の緒を切った。自分との結婚の時にはブタ3頭と300キナしか与えないでおきながら、敵氏族の〈クリガイ〉にかくも巨額の婚資を与えるとは何事か！というのが怒りの源だった。ククは弟のアイエに銀行から2万5000キナ（500万円）を引き出させ、アイエは幼いときからの友、ジョゼフ・プルノの銀行口座に振り込んだ。これを知ったサイモンは銃を空に向けて放ち、ウィンディ兄弟を店から追い出した。ウィンディ兄弟はウィワ・コロウィの第一夫人であったエレベ・コロウィから空き部屋を与えてもらうまで、ポート・モレスビー市内を路上生活をして生き延びたのだった。

これがサイモンのビジネス武士団崩壊の始まりだった。村の若い衆も最初の総選挙から5年が経ち、そろそろ嫁取りの年齢に達しようとしていた。親から嫁取りの話が来たタケスやテネスといった若い衆が村へ戻っていった。アンソニー・テモも当選したは良いが、党が野党に回ってしまった。それより何より決定的だったのは、1993年、古着ビジネスというアイディアに追随者（競争者）が簇生してきたことだった。しかも、彼らは店舗を設けず、ポート・モレスビー市の公設市場で商売を始めた分、サイモンの店の古着より安い価格を付けることができた。客は潮が退くように、サイモンの店から遠ざかっていった。シュムペーターの所謂、新機軸に基づく企業者利潤（あるいは創業者利潤）はわずか3年で失われ、しかもサイモンの競争相手達はサイモンを上回る新機軸を打ち出し、サイモンのビジネスを干上がらせたのである。ここでサイモンは学校秀才の弱点をさらけ出した。彼はこの新しい事態

に対して打つべき手を思いつくことができなかつたのである。事態が悪化するとともに、サイモンは酒と女に惑溺するようになった。それとともに、アンブプルの若い衆はサイモンのもとを、一人、また一人と去っていった。興隆の目覚ましと同じように、没落も急速であった。まず、1994年にラバウル支店が閉鎖された。翌年にはラエ支店が、さらに1996年ゲレフの2支店が閉鎖され、次弟のケベンゲまでが見切りをつけて、村へ戻っていった。残ったのはバディリ本店と三弟キンジャロ、リンビエとグリルのタンビ兄弟、村の村落政治評議員クンビエの息子で、ポート・モレスビーでパートナーを見つけて結婚したモスイスら一握りの結婚適齢期に達しつつある若い衆のみとなった。それに追い討ちをかけるように、1996年サイモンの村における後ろ盾であったアンブプル村のイエノミのタンビと自身の父アペが同時に敵の邪術に倒れたのである。サイモンは父をマウント・ハーゲンの総合病院へ送り、タンビをポート・モレスビーの総合病院に入れたが、二人は同日同時刻に死んでしまったのである。追いつめられたサイモンが打ち出した打開策は1997年の総選挙に打って出るというものだった。サイモンは結局、政治の人で、企業家（アントルブルナー）ではなかつたのである。

グライミー・ワレナは1992年、環境破壊の元凶であるとされ、ビーチウッド製材所が閉鎖されるとともに没落の道を歩んでいたが、アンソニー・テモがインボング選挙区から再出馬を表明すると、テモに義理のあるサイモンはテモとの対立を避けて、ポート・モレスビーから出馬することとなった。カリリポイ随一の実力者であったタンビの死によって後ろ盾を失ったこともサイモンの決断の一因をなしていた。

サイモンは最後の賭けに、手元に残った60万キナ（7500万円）を投じた。そして、村から18人の若い衆をポート・モレスビーに呼び寄せ、バディリ本店の6人と合わせて24人の一大キャンペーン・チームを作り、トラック4台を総動員して、音楽を交えての華々しい選挙キャンペーンを繰り広げた。だが、所詮、サイモンはポート・モレスビーでは余所者にすぎなかつた。しかも、同じ選挙区からは元パプアニューギニア銀行総裁で、ナイトの称号をエ

リザベスⅡ世から与えられたサー・メケレ・モロータが人民民主運動から立候補していた。人民民主運動は党首パイアス・ウィンティが政権を担当していた時に「プッシュ・ノース」(北へ押し出す)政策を呼号して、大陸中国やマレーシア、シンガポールの華僑とコネクションを作り上げ、ウィンティ自身は南太平洋(豪・ニュージーランドは除く)随一の富豪と称されるまでになっていた。こうした地盤、看板、カバンの三つを兼ね備えたモロータ候補の前に、サイモンは一敗地に塗れた。順位は4位、しかも8万キナという巨額の借財を負うこととなった。

一方、サイモンの支援を失ったアンソニー・テモもインボング選挙区では少数のメンディ族の支持しか得られず、あえなく落選した。インボング選挙区ではウィンティの片腕として働いてきたピラ・ニンギが人民民主運動候補として捲土重来を期して、再度名乗りをあげた。また、カウペナ小学校第1期生で、パプアニューギニア大学卒業後、官界に入り、防衛省や通産省の事務次官(官僚のトップである)を歴任してきたピーター・ペプルがついに政界に打って出た。ピラの地盤はギルウェ山南麓のクスクンベ地域、ピーター・ペプルの地盤はイアリブ山西麓の〈エガイ〉〈マガイ〉氏族と母の出身地モカゴモイエ地域であった。二人は接戦を演じたが、結果はピーターが僅差でピラを制した。しかし、ピラは選挙違反のかどでピーターを告訴し、二人は以後、不倶戴天の敵となっていく。

第4節 インボング・ビジネスマンの勃興とその生態

前節において、我々はインボング高教育エリートの生態に焦点を当てて、インボング文明史40数年を通観した。いわば、国会議員選挙をメルクマールとした、『史記』で言うなら「本紀」に当たる正史を描いたのである。歴代国会議員はグライミー・ワレナ(1977, 1982年当選)、アンソニー・テモ(1987, 1992年当選)、ピーター・ペプル(1997年当選)であった。しかし、私の関心

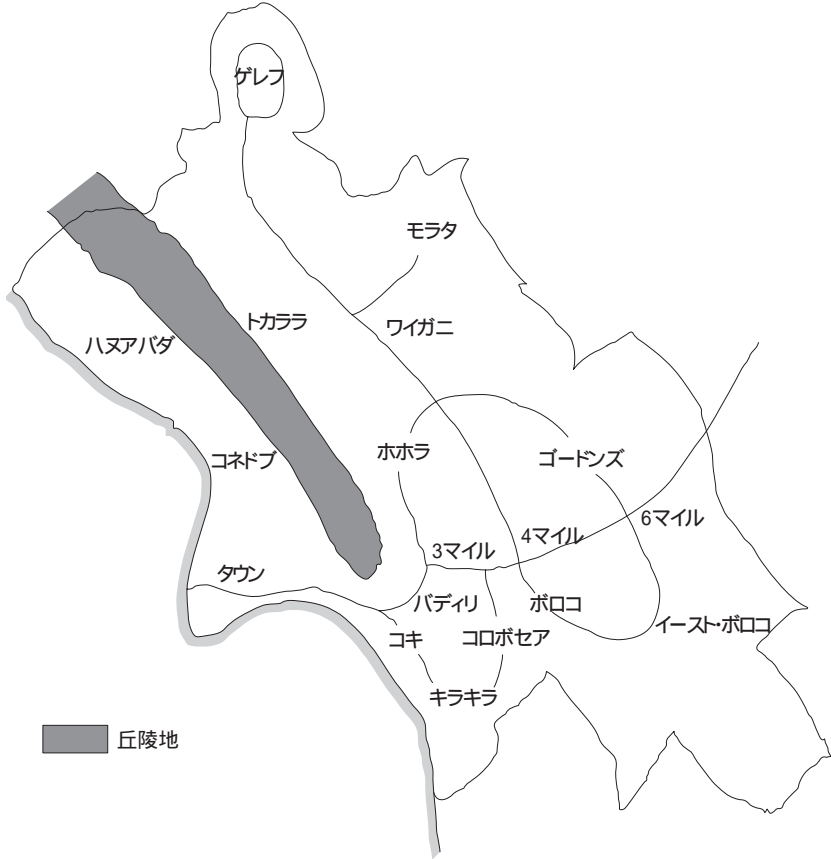
は国会議員そのものより、彼らと覇を争い、あるいは彼らを支持し、その見返りとして権力と富の階段を登ろうと全力を傾注した高教育エリートにであった。サイモン・アベやピラ・ニンギといった男達がそれである。サイモンもピラも、国会議員（ピラの場合は2度首相を務めた人民民主運動党首パイアス・ウィンティ、サイモンの場合は運輸大臣を務めたアンソニー・テモ）の秘書というニッチにおいて、己の教育を地位と権力に変換していった。サイモンは古着ビジネスに進出したが、それもビジネスマンにして国会議員であった帰化白人ロバート・サクリングの助言とコネクション、そしてテモの庇護のもとにおいてであった。そして、サイモンが経済人でなく、所詮は政治の人であったことは、彼のビジネスの没落の果てに取った行動が、財産を蕩尽しての総選挙キャンペーンであったことに如実に示されている。すなわち、高教育エリートの本来の闘技場は経済ではなく、政治や行政の世界だったのである。インボング・ビジネスマンを輩出したのは、サイモンやピラやピーター・ペブルのような大学に入学するような高教育エリート層（学校秀才）ではなく、ミスター・Tと尊称されるトロンベナ・ブルノや彼の部下のマネージャー達、グライミー・ワレナやアンソニー・テモのように中等教育を了えた男達のグループだったのである。学校教育における頭脳の明晰さとビジネスマンに必要な知恵はおそらく異なる種類の知の形態なのであろう。

本節はビジネスマンに必要な知のあり方とはいかなるものなのかを複数のビジネスマンの肖像の中から見出していくことを目的とする。最初に登場するのは、サイモンの第一夫人タクの弟、アイエ・ウィンディである。

アイエが異母兄弟のエンバと同年であったために、1家族につき2人以上は公立中学に行けないという文部省の規定により、アンブル村で少しブラブラした後、パイブル・チャーチの経営するパバラブル中学に1981年入学したことはすでに述べた。アイエは1985年、パバラブル中学を学年2位の成績で卒業した後、村に帰って少しブラブラしていたが、カウベナ・ミッシェン・ステーションで25年以上の長きにわたって子弟の教育に携わっていたミス・レニタこと、レニタ・バステインの口聞きで、ビーチウッド製材所に事

務員として採用される。この時、アイエはすでにビジネスに己の人生を賭けることを決意した。アイエは酒にも煙草にも手を出さず、また両親に給料の中から割いて渡すこともせず、ひたすら爪の火を灯すようにして僅かな賃金を蓄えていった。そして、学費が貯まるやパプアニューギニア第二の都市で産業センターであるラエのテクニカル・カレッジに応募し、会計学コースに入学した。アイエは勤勉に学び、好成績を上げ、ダンロップ社の奨学金を得て1989年首席で卒業するとともに、ダンロップ社のマウント・ハーゲン支店に採用され、白人女性マネージャーにその有能を買われ、自分が転勤する時にはアイエをマネージャーに据えろとの約束をもらった。が、女性マネージャーの後には、ネポティズムによって別の男が座った。これに怒ったアイエは村に帰ったが、まさにその頃、サイモンが古着ビジネスを始めたのであった。早速、サイモンはアイエをポート・モレスビーに呼び寄せ、マネージャーの地位に据えた。そして、サイモンが対外接衝に、アイエがビジネスの総覧にと分業体制を採った。この分業態勢が壊れるのは、前節でも述べたように、サイモンが浮気をして第二夫人を敵氏族から娶り、第一夫人のククに屈辱を与えるような巨額の婚資を与えた時である。ポート・モレスビーの町を路上生活した後、サイモンの口座から強奪した2万5000キナを元手に、アイエを頭とするウィンディ兄弟はポート・モレスビー市内に万屋を開いた。中学卒業後、電電公社に就職し、後にサイモンのビジネスに参加し、サイモンの援助で大学へ通っていた異母兄弟のエンバも、大学を辞してアイエのビジネスに合流した。それにアイエの次弟でメンディ中学卒のサニも加わり、3人で商売を始めた。車も買い、商品を調達すると同時に、ビン缶収集を行った。そして、サニはパプアニューギニアで庶民が好む、軽い興奮をもたらすピンロウジュを路上で売るなど、あらゆるビジネス・チャンスをとらえて、事業を少しずつ拡大していった。朝は5～6時に起きて仕事を終えるのは夜の10～11時であった。そして、主食は乾パンであった。こうした、儉約と商機に鋭いアイエのリードで、売り上げは順調に拡大していった。店をもう一軒ホホラ地区に構え、タイヤ・サービスと弁当屋も始めた。また、闇でビール

図8 ポートモレスビー市街地



(出所) 筆者作成。

も売った。

そうした商売を続けていくうちに、アイエはポート・モレスビーの中下層の市民が朝食をとらずに仕事に出かけていくことに気づいた。その発見に、トロンベナ・プルノが高地地方においてスコーン・ビジネスを成功させていることを結びつけた時、アイエはポート・モレスビー市民15万人の巨大な潜在的需要を掘り当てたのだった。それまでパンを食する層は家に大型冷蔵庫

を持ち、自動車ですーパー・マーケットに2斤入りのパンを買いにいける層に限られていたのである。アイエのアイディアは中下層市民が毎日生活物資を買いに行く、ポート・モレスビー全体に散らばる万屋(タッカー・ボックス)や公設市場に安価なスコーンと呼ばれる小型の丸パンを配達して回るというものだった。アイエは早速、トロンベナの弟で、少年時代からの竹馬の友、ジョゼフ・プルノにスコーン製造のノウハウを教わり、これまで築き上げてきたビジネスを売却し、銀行から10万キナを借り出し、ゲレフ地区の巨大な倉庫を買い取り、必要な機械と配達に必要な車を買入れると、全力をスコーン・ビジネスに傾注した。そして、アイエの賭けは見事に当たり、ポート・モレスビー中下層市民はアイエの供給するスコーンに飛びついた。スコーン1個は30トヤ(当時のレートで30円)。中下層民にも十分手を出せる額であった。3台のバンはフル操業でポート・モレスビー中の万屋や市場を回ったが、それでも足らず、更に2台のバンを買い足した。1台当たりの売上高は約500キナ、1日の総売上高は2500キナに達した。それでもまだ需要に追いつけないとみたアイエは異母兄弟のエンバにワイガニ地区にパン工場を作らせ、双方合わせての売り上げは1日4000キナ(約50万円)に達した。ポート・モレスビー市民15万の内、1万人以上がウィンディ兄弟の生産するスコーンを食べていたことになる。

アイエはこうしてシムペーターの所謂「新結合」を遂行し、中下層民の潜在的欲望に形を与え、すなわち潜在的需要に新商品を供給し、新市場を開拓したのだった(シムペーター [1977a: 198])。そして、それによる独占的な企業利潤(ないしは創業者利潤)は莫大なものとなった。更に言うならば、アイエは彼のスコーン・ビジネスを通じてポート・モレスビー中下層民のライフスタイルも変えていったのである。

こうした独占的巨利を博するビジネスが現れると、シムペーターも喝破したとおり、追隨者が群れを成して沸き上がる(シムペーター [1977b: 18])。スコーン・ビジネスもその例外ではなかった。バターカップ・カンパニー、ハイランド・フレッシュ、ゴードン・ベーカリー、テイスティー・ベーカリー

などといった参入者が続々と現れた。ミスター・Tことトロンベナ・プルノもアワ・ベーカーリー・ポート・モレスビー支店を設立した。こうして、すさまじい凌ぎ合いが始まった。万屋や公設市場に一步でも早く着いた会社の車が仕入れをすませると、遅れてきた会社の車はまだスコーンの卸されていない万屋を求めて駆け回るのである。生き馬の目を抜くような競争が繰り広げられたが、奇妙なことはこれらスコーン・ビジネスに参入してきたベーカーリーのほとんどがインボン族の経営するところであったことである。

とまれ、独占的企業者利潤を失ったアイエがサイモンと異なっていた点は新たなビジネス・アイデアを思いついたことである。今度、彼が目をつけたのはパプアニューギニア防衛軍であった。それまで、パプアニューギニア防衛軍に糧食を供給していたのは白人やチャイニーズのビジネスマン達であり、パプアニューギニア人供給者はいなかったのである。アイエが目をつけたのはまさにその点であった。彼はパプアニューギニア防衛軍のパンやスコーンの納入競札に加わり、見事落札したのである。パプアニューギニア防衛軍の兵站担当者のナショナリズムを見抜いた結果であることは言うまでもない。こうして、毎日850キナの売り上げを独占的に入手することになったアイエのゲレフ・ベーカーリーは他社に比べて優位に立った。再び、企業者利潤が入ってくるようになり、しかもそれは契約期間の3年間は保証されているのである。そして、アイエはパン・スコーン納入を通して、防衛軍の兵站担当者とのコネクションを深めていった。

こうして、将来への布石を打つ一方で、自らの母ゴパの産んだ末弟クゲコを公立イアリブ中学からポート・モレスビーのエリート校ポート・モレスビー・グラマー・スクールに送り込み、卒業するやマネージャー見習いとしてルーティン・ワークはクゲコに任せ、自らは新たなビジネス・チャンスを求めて対外折衝に専念した。そしてラエの防衛軍兵舎への糧食供給権を落札して、ラエに卸売業を開設した。インボン族の地から飛行機で飛ばねばならないポート・モレスビーよりも、ハイランズ・ハイウェイで陸路、往還できるラエには、ポート・モレスビーよりも数多くのインボン族がビジネスを

営んでいたのである。

アイエは一月ごとにラエとポート・モレスビーを往復しながら、ポート・モレスビーのパン工場とラエの卸売店を経営していたが、徐々に軸足をラエに置くようになっていった。ポート・モレスビーでは1975年750キナで州政府に買収されてコーヒー・プランテーションが創設されたは良いが、公営企業の常として放置されて、荒れ果てていたコロパンギの土地70.85ヘクタールを自らの手に取り戻し、復興させるために、弁護士を通して、裁判所に土地返還請求の手続きを取ったり、投資促進公社を通じて土地登記を進めるとともに、やはりコロパンギに置かれていた警察用地の賃貸契約の交渉を行ったりした。これらの土地のももとの保有者であった〈ナウリガイ〉ヤギリがその死に臨んで、アイエに土地を譲渡する旨、遺言を残したからである。ヤギリはコロパンギの土地の将来をアイエに託したのである。

その間も、アイエはポート・モレスビーにビジネス・チャンスを探っていたが、アイエの鋭い目にはポート・モレスビーは経済的に破綻に向かっているものと映った。

そうしたアイエのポート・モレスビーからの撤退を決定的にしたのは、ゲレフ・ベーカーの経営を委ねていたクゲコの裏切りであった。クゲコは売上金から1万5000キナを横領し、チンブー族のスラムのある6マイル地区に万屋を構え、2台のタクシーを購入して、自らビジネスを始めたのだった。クゲコは2年の間、朝は4時に起き、パン焼き職人を監督して、パンやスコーンの製造をスタートさせ、焼き上がるとパックしたスコーンをバンに搬入し、ドライバーを送り出すと、自らは防衛軍の兵舎へパンやスコーンを納入しに行き、帰ってくると前日の売り上げを銀行に預けに行き、再び帰ってくると、送り出したバンの帰るのを待ちながら翌日のパンとスコーンの原材料（小麦粉、イースト、塩、植物油など）の手配をする。そして、それらの原材料をミキサーに入れ、こね合わせ、こね上がった生地を数千個のパンやスコーンの形に整えさせる。その間に、原材料の購入を行い、帰ってくると、バンの売り上げを銀行預金用に紙幣、硬貨の種類別に輪ゴムでとめ、帳簿につけてい

く。そして、その日の売り上げを麻袋に入れて封をする頃には夜も7～8時になっている。こうした1日15～16時間の心身を消耗させる労働を強いながら、吝嗇なアイエはクゲコに都市最低賃金すれすれの月160キナ（6400円）しか与えなかったのである。食住は保証しているにしても、あまりに厳しい搾取である。クゲコは2年の間忍耐をしていたが、忍耐力も限界に達し、秘かに6マイル地区の万屋を買い取り、タクシー2台を購入する金を横領したのだった。窮したアイエは妹のルジとその夫ケン・モロにパン工場の経営権を譲り、自身は一定の利子を受け取る態勢にした。こうして、アイエはポート・モレスビーを去り、ラエの卸売店の経営に専念していった。

ポート・モレスビーに残ったアイエの異母兄弟のエンバもパン工場の敷地の所有者ピーター・マッキンジェ（彼もまたインボング・ビジネスマン）から地代を2倍にされて、経営が立ちゆかなくなり、パン工場を閉鎖した。アイエの次弟であるサニは、アイエの第二夫人ルースとの姦淫をアイエに訴えられ（本人は否定）、ボマナ刑務所に拘留されて以来、アイエとの関係を断ち、フィリピン企業の見習いエンジニアとして、一家とは離れて一人暮らしを始めた。また、クゲコのビジネスはスタートして半年で立ちゆかなくなり始め、財政的援助を筆者に訴える手紙を送ってきた。クゲコは見習いマネージャー時代、ビジネスはそう難しいものではないと筆者に語っていたが、彼のマネージャーとしての能力はアイエの企業家としての能力、商機を見抜く眼力、交渉力および関係者との間にコネクションを築いていく能力を土台として初めて発揮されることができたものであって、彼はその点を見誤っていたのである。また、アイエから経営を譲渡されたアイエの妹ルジの夫ケン・モロのパン工場も激しい競争の中で没落していき、結局ウィンディ兄弟のビジネスの内、生き残ったのはラエのアイエの卸売店ただ一つとなったのである。

そのアイエにも悲劇は訪れた。彼の初子であったユキが亡くなったのである。2001年1月のことであった。彼はユキを故郷のアンブル村に埋葬し、このことをきっかけにアンブルでのビジネスを行うことを決意する。

といっても、村の万屋を始めるなどという小商いを行ったのではなかった。

アイエは防衛軍との契約が切れる時、払い込まれた20万1000キナに自己資金を加え、25万キナ（邦貨にして約1000万円）の投資を行い、父ウインディのハイウェイ沿いのコーヒー園を切り倒し、砂利を一面に敷いて倉庫を2軒、事務所、コンテナを2台、トラックを2台備えると、パウエンダ水力発電所の送電線から電線を引き、敷地を鉄条網で囲った。アイエは村のど真ん中に1000万円にも相当する資本を投下して卸売店を建てたのである。だが、この一見無謀とも思われる投資の背後にもアイエの透徹した観察眼が光っていたのである。

村々に散らばる小さな万屋はそれまでマウント・ハーゲンまで出かけて、商品を仕入れていた。だが、これには一つの大きな困難が横たわっていた。仕入れた何箱にも及ぶ米袋やサバ缶やコンビーフやコーラや乾パンを運ぶ車がなかったのである。村の商人達は必死になってこれらの商品を自分の村まで運んでくれるトラックやマイクロ・バスを探さねばならなかったのである。だが、乗客を満載したトラックやマイクロ・バスの中から商品を村まで運んでくれる車を見出すことは至難の業であった。これが村々の万屋達の慢性的頭痛の種であったのだ。そして、アイエはまさにそこに商機を見出したのである。彼が打ち出した新機軸（イノベーション）は注文配達という方法であった。アイエの卸売店から同心円上に配達費を設定しておいて、万屋の注文に応じて配達を行うのである。万屋は幾ばくかの配達費を支払わねばならないが、その額はマウント・ハーゲンで拾った車に商品を置かせてもらうコストに比べればはるかに安かった。それより何より、一々商品を村まで運んでくれる車を探し出さねばならぬという煩わしい労苦をアイエの卸売店は一気に解消してくれた。これからは身一つでアンブプル村まで出向いて注文し、手ぶらで帰ることができるのである。この便宜は何物にも代え難いメリットであった。アンブプルよりハイウェイの上手にある村々はもとより、下手のパバラブルまで商圈は及んだ。インボング族の村々はもとより、ウィル、ケワ、メアミといった民族の村々からも注文が殺到した。こうしてアイエは南高地州東部に散らばる万屋をマウント・ハーゲンの卸売商から奪い取ったのであ

る。そして、約20万人の商圏が一気に成立したのである。利潤が月2万キナであったとしても、初期投資の25万キナには1年で回収され、以後はシムペーターの言うところの「企業者利潤」を独占することができるのである(シムペーター [1977b: 9, 17])。ここでもアイエの巨大な潜在的需要を鋭く見抜き、それに供給という形を与えてやる能力が遺憾なく発揮されたのである。

こうして、アイエは週ごとにラエの卸売店とアンプル村の卸売店の間を往復し、両店のビジネスを統轄するという多忙な生活に忙殺されることとなった。

ラエは古くはエンバの妻デビの父、ウェイン・ノルムが市内バスを運行し、製材所を経営し、宿泊用ロッジを営んでいた頃からインボング族のビジネスを志す者が多数蟻集する都市であった。パプアニューギニア総人口の40%を占めるニューギニア高地を後背地として持ち、パプアニューギニア随一の産業センターであるラエにはビジネス・チャンスがふんだんに転がっていたのである。

ルーベン・カリはカンベゴモイエ部族のカラノという村に生まれたが、例によってバイブル・ミッションの小学校を卒業した後、アイエ同様バイブル・ミッションの経営するパパラブル中学に入学した。中学を了えると、1973年パプアニューギニア防衛軍に志願入隊する。13年、防衛軍で勤めた後、1986年除隊し、退職金でマイクロ・バスを買い、ラエでバス・ビジネスを始めた。ルーベンのバス・ビジネスは当たり、バス10台を運行させるまでになった。ここで、ルーベンはビジネスを一挙に拡大させようと、ビジネス・チャンスを探った結果、製材業が最も有望であるように思われた。製材には採金ほどの設備が要らない上に、金は地中に隠れているのに対し、木材は地上に顕れているからである。ルーベンはフォークリフト、三菱キャタピラ、フソーの大型トラック、ランド・クルーザーなど必要な資材を買い調べていった。そして、技術的知識のあるフィリピン人3人、それにパプアニューギニア人労働者25人を雇い、製材所を建設した。そして、林野局の許可を得て、ラエ

近郊の部族と契約を交し、その部族の所有地の森林を伐採していった。一つの区画につき、5000立方メートルの木材を伐採すると、次の区画に移るという方式である。1立方メートル当たりの製材された材木を輸出すると、1000米ドル以上になるから、製材業者は森林所有部族に伐採使用料を払ってもなお桁外れの儲けを手にすることができるのである。3人のフィリピン人の横領によって、大きな打撃を受けたルーベンであるが、製材業の旨みを覚えた彼は今度はインボングの地に製材所を作ろうと考えている。場所はギルウェ山南麓の彼の出身村カラノの近くで、標高が高く、寒冷でコーヒー栽培ができず、現金収入の少ないこの地域の住民にクリンキ・パインなどの針葉樹を伐採させ、地域の振興を図ると同時に、自らも製材した材木をラエまで運んで輸出し、利を得ようという構想である。

ルーベンに限らず、インボングのビジネス成功者に半ば普遍的に見られる現象は自己の利益を地元の発展に結びつけようとする指向である。

ポネモンゴ村の村落評議員（村長に相当する）メケ・ブレはカウペナで政府の補助金を受けながら病院を経営しているが、彼はアイエ、エンバのウィンディ兄弟（彼らはポネモンゴで生まれ育ったことを想起していただきたい）にカウペナに全寮制の中学を造ることを持ちかけた。メケ・ブレもまたカウペナ・バイブル・ミッションの小学校を出ると、パバラブルのバイブル・ミッションの中学に入学した。卒業後、看護学校で学んだ彼はポネモンゴ村に帰ると、ミス・レニタからミッションの診療所の経営を委ねられた（バイブル・ミッションとポネモンゴ村の特別な関係を思い出していただきたい）。メケ・ブレは診療所に政府からの補助金を醸出させることに成功するとともに、病院に昇格させ、患者からは2キナの診療費を取り、病院を財政的に成立させた。そして、彼自身も院長として少なからぬ報酬を手にし、彼のコーヒー園からの現金収入とともにラエに共同で店舗を設け、ビジネスに励んでいる。主立った中等教育卒業者がトロロンベナのベーカリー・チェーンのマネージャーとして、村の外へ出ている中、一人、村に残ったメケは村落評議員に選ばれ、村の指導者となり、カウペナ・ミッション・ステーション内に建てられたバン

ガロー風の家に住んでいる。家の建材は製材された板にワックスをかけた壁や床を持ち、ガラス窓からは熱帯高地の陽光が明るく射しこんでくる。家は電化され、冷蔵庫、電灯、電気オープンを備え、トタンの屋根の桶からウォーター・タンクに集められた水は水道管でステンレス製のシンク（流し）の蛇口まで導かれ、洋風のキッチンで調理が行われる。そして、テーブルと椅子の食卓がしつらえられ、来客用にはソファァーが用意されている。主食も米であり、それにローストされた鶏肉とゲパヤクニといった緑色野菜、料理用バナナ、サツマイモを添えたものがメイン・ディッシュとなる。そして、メケは病院用兼自家用のランドクルーザーを2台持っている。こうしたライフ・スタイルは成功者達が白人から継受したライフ・スタイルに、ニューギニア高地流のアレンジを施したものである。更に、付け加えると、壁にはイエス・キリストの肖像とそれに聖書から取られた文言、たとえば「主を信頼したてまつり、その希望が主であるところの者は祝福されている」（『エレミア書』17:7）などの座右の銘が記された壁掛け布がかかっている。

ラエやマウント・ハーゲンなどの都市で成功したビジネスマンも、村にこうした家を建て、週末には村に戻り、ウィーク・エンドを楽しむのである。カウペナ・ミッション・ステーションには他に、パプアニューギニア・バイブル・チャーチの議長モンドバ・ミニ、そしてカウペナ小学校長パガ・キリが同じようなライフ・スタイルを享受している。

そして、この3人、すなわちメケ・プレ、モンドバ・ミニ、パガ・キリの3人がアイエとエンバのウィンディ兄弟に呼びかけて、筆者のコネクションを通じて日本政府からのODAでカウペナに全寮制の中学を造ろうと図ったのである。その計画にはラエで建築業を営んでいる、これもカウペナ小学校からパパラブル中学へ進み、卒業後、テクニカル・カレッジで建築を学び、白人の建築会社に務めた後、自ら建築会社を興した、オレイ村（モカゴモイエ部族）出身で、ラエではアイエの家の隣に家を構えているダニー・ケビも、建設受注を得ようと一枚かんだ。

後に詳述するが、インボング族は年率約5%という驚異的な人口爆発を続

けており、筆者の調査地カリリポイ部族の村々も1985年当時は300～400人規模であったのが、2000年センサスによれば、ほぼどの村も人口倍増しており、土地不足と人口過剰がその不気味な姿を現しつつある。ところが、フォーマルな私的セクターの雇用は1989年を100とした時、2000年には98に落ちている (*Bank of Papua New Guinea Quarterly Economic Bulletin*, March 2001)。都市へ流入しても、然るべき学歴を持たぬ者には雇用は与えられないのである。一方、パパラブルの中学も収容人員は手一杯であり、公立のイアリブ中学はインボンゴ、ウィル、ケワの間にトラブルが起こる度に閉鎖されて（イアリブ中学はインボンゴ、ウィル、ケワの3民族の境界点に建っているのである）、カリリポイ地域から寄宿舎生活をしながら学んでいる学生達はその度に授業を中断させられて、村々に帰ってこなければならなかった。そこで、メケ、モンドバ、パガの3人はカリリポイを中心として、モカゴモイエ、クヌクンベ、ブネノムイエなどのイアリブ郡庁所在地から遠隔の部族の子供達に安定した環境で、中等教育を与えようとカウペナに寄宿舎付き中学校の建設を決意したのである。

こうして、カリリポイ部族の成功者達はインボンゴ族の公共の利益のために、結束して教育機会増大のための計画を練り上げたのである。そこには、すでにノブレス・オブリージュの観念を伴った指導者意識を見て取ることができる。そして、成功者達はそうした事業を論じあうために互いの家を訪問して、会食するのである。更には、ポート・モレスビー在住のエンバのように、帰郷しても父母の家に泊まらず、母方の〈コレ〉〈ペライエ〉氏族対出身のやはりパパラブル中学卒でコーヒー・バイヤー（仲買人）、給油所を営み、更には30頭のブタ（伝統的なインボンゴのイエノミ達は10頭のブタを飼うのが精々である）と50ボックス（籠）の鶏の養豚・養鶏飼育を行っている地元ビジネスマン、レピ・コヤイエのバンガロー風の家で寝泊まりするというように、インボンゴ族の成功者達は氏族はもちろん、部族を超えた親密な交流を行っているのである。

このように、村に居ようと、都市に住もうと、インボンゴ族の成功者達は

伝統的氏族や部族を超えて、共通のライフ・スタイル、共通の指導者意識、日常生活での交流、共同の事業、共通のキリスト教的な宗教意識を通して一つの階級として姿を現し始めているのである。

第5節 人生ゲームの転換と階級形成

ところが、アンブル村の村人達の反応は違った。

ある日、村のエレメンタリー・スクール（小学校低学年）の校長を務めるイアリブ中学卒のマーティン・ヨコを始めとする就学期の子女を持つ30代の小学校も卒業していない親達が私のもとに陳情に現れた。この小事件の背景を成すパプアニューギニアの教育制度について、まず簡単な説明をしておこう。

1999年、前政権の外交上の失策（大陸中国と台湾と同時に国交を結ぼうとした）に乗じて、不信任決議を提出し、多数派工作に成功した人民民主運動党のメケレ・モロタ首相は政権を取るが早いか、IMFの助言なども受け入れ、教育制度の改革を行った。その柱は2本あった。まず、第一に、教育費の受益者自己負担原則の導入、次いで小学校を低学年と高学年に分け、低学年は各村が現地語で教育を行うエレメンタリー・スクール、高学年は数村がまとまってインボン族ならば部族単位で一校を持ち、英語で授業を行うコミュニティ・スクールに分けたことである。エレメンタリー・スクールは村落政治評議員（村長）が責任を持ち、村人達の手で茅葺きの校舎を建てさせ、先生は立って、生徒達は地べたに座って授業を受けるという粗末なものであり、教科書もなく、教員は村人の中から中学を卒業した者に、簡単なトレーニングを与えて、安い俸給のもとで教育を行わせるというものであった⁽²⁾。ここにも、教育の受益者自己負担原則の一端を窺うことができる。要は、小学校の低学年の教育は各村が責任をもって行えということである。その実態は教育の棄民政策に等しい。

教育が経済的・社会的成功の鍵であることを、村々の成功者達のライフ・スタイルから見て取った「負け組」の多くの村人達は、敗者復活戦はやはり教育にしかないことを痛いほど感じ取っている。彼ら自身は小学校を飛び出し、野山を駆けめぐり、様々な遊び（狩りや釣など）に興じ、思春期には女の子の尻を追い回し、近隣の村々の少年達と戦争ごっこをしたりして、存分に自由な少年生活を満喫できた。そして、伝統的な生きるための知恵をその中から学び、イエノミになるためのリーダーシップの原型もそうした遊びの中から生まれてきた。とりわけ、アンブプルの若い衆はサイモンの古着屋で働きながら、首都ポート・モレスビーの空気も吸い、更に村に残った者、村に戻った者達もテモ・サイモン組の推進した公共事業（道路工事）の恩沢を存分に浴びた。コーヒー価格も1ポンド2～3米ドルと好価格をつけた。概して、テモが国会議員だった時代は好景気に湧いた10年であった。村人達は樂觀にあふれ、この時代が未来永劫続くものと信じてノンチャラントにその日暮らしを続けた。給料日やコーヒーを売った日にはテネのビア・ハウスに集まり、一晚かけて各人ビール2～3カートン（24～36本）を痛飲した。中でも豪儀だったのは、道路拡張工事のため、コーヒー園を売却した男達だった。アンブプルのテネとテレマは、マウント・ハーゲンのハーゲン・パーク・ホテルを共に2部屋借り切って、各部屋に1人ずつ女を住ませ、酒と女の生活を半年続け、それにも飽きるとマイクロ・バスを貸し切りにしてハイランズ・ハイウェイの始点のラエまで旅を楽しんだ。こうして、テネやテレマは手にした5万キナ（当時約600万円）の金を消費してしまった。コーヒー園からの収入の100年分を半年で蕩尽してしまったのである。そうしたユーフォリアの中で、アンブプル村の20～30代の男達はせっせと子造りに励んだ。国会議員がアンソニー・テモからピーター・ペブルに代わる頃にはかつての少年達はすでに30代にさしかかっていた。そして、1997年総選挙で首相の座に就いたビル・スケイトの経済失政のため、パプアニューギニアの経済は急速に悪化していった。通貨価値は急激に下落し、インフレーションが昂進した。その上、貨幣収入の最大の源であるコーヒーの国際価格は低落を続け、2001

年7月には1ポンド0.75米ドルにまで下がった。かつてコーヒー・シーズン(7~8月)には週に4,5回は米の御飯にサバ缶のおかずという御馳走を食べることのできていた村人達は今では週に1,2回米の飯の上にニュージーランド製の安いインスタントラーメンを載せて食べるのが精一杯という状況に陥った。そして,30代半ばにさしかかり,気づいた時には,成功者達がかつての白人達のような暮らしをして,社会的成功の道を歩んでいる姿と自分達の悲惨な姿や悲観的将来との間にくっきりとした差がついていたのである。彼らの浮かれていた20年間に状況は激変し,人生というゲームそのもののあり方が変わっていたのである。自分達の父親達の時代には,家族を持つ男の誰もが自分の家族を養っていくに足る土地を持っていたのみならず,誰もが財産として最低数頭のブタを持ち,威厳と同等の資格をもってガパウゲ(家長の家=村の評定所)で村の公事を議していたのものであった。もちろん,村を代表するイエノミもいたが,彼はプリムス・インテル・パレス(同輩者中の第一人者)にすぎず,村の外交(和戦の決定・儀礼的贈与交換)を指導する資格は持っていたが,彼は自らの提案を同輩の家長達に示し,その合議に委ね,彼らを説得した上で,事を推し進めるのだった。イエノミと他の家長の間に富の大きさ,すなわちブタの数において差はあったが,それも4~5頭と10~12頭程度の差でライフ・スタイルは全く同等であった。そして,イエノミと認められるには20代半ばで最初の結婚をしてから,儀礼的贈与交換に何度も参加し,伝統的慣習やインボンゲの歴史,演説の作法等伝統的知の体系にゆっくりと通暁してゆき,村の内外から「奴が次のイエノミじゃ」と認められるまでには20年の歳月がかかり,40代も半ばになる頃までの長い歳月を要したのである。父親達の時代にはそうしたリーダーシップと名誉・威信をめぐるゲームの規則があった。事実,1996年に呪殺されるまで,アンブブル村のイエノミとして君臨し,カリリポイ部族随一の実力者として尊敬されていたタンビは,学校などにも通ったことはなかったし,英語はおろか,若い世代なら誰でもしゃべるピジン語すらしゃべれなかった。

だが,今や人生というゲームは様相を一変してしまったのだ。ゲームの形

も目標も、規則も、必要とされる資質もすべてが変わってしまったのである。成功者となるためには、最低でも中学卒、可能ならばプラスアルファの学校教育を受けていることと英語を巧みに操れることは必要最低限の資格となった。自由放任が少年時代の特権であったインボングの少年達にとっては机の前に1時間じっと座って、一方的に教師が話す言葉を聞くこと自体、苦痛な体験である。しかも、教師の言う言葉を理解し、記憶し、応用できる者は数少ない。こうした学校教育を無事通過するにはすでに少年の段階から身体技法の変化（自由に野山を渉猟すること→机の前に1時間座り続けて大人の話聞き続ける）、そして知的構造の変換（体験を通して生きる知恵を身につける→本に書かれてあることを理解して記憶する）が要求される。こうして、パプアニューギニアの同世代人口の80%が入学する小学生（少年少女）のうち、中学校へ進学できるのは同世代人口の14%へと淘汰される。アンブル村でも中学在学中の少年少女はグレード7からグレード10まで合わせても10人にしかすぎない。1学年2.5人である。人口約800人、20歳までの少年人口が半ばを占めるアンブル村の中学進学率は12.5%ということになる。成功者、または「勝ち組」となるためには、最低限この十数%の中に入ることが必須の条件となる。

私の家に押しかけてきた小学校低学年、アンブル・エレメンタリー・スクールの教師や親達が目の色変えて学校をトタンで屋根を葺き、製材された壁や床をもって建設された建物にしてくれと訴えたのは、子供達が新たな人生ゲームの軌道から外れないよう成功への階段を歩んでゆくための資格を確保してやりたいとの一念からであった。自分達は人生ゲームの転換に気づかず、「負け組」（これを彼らはビジン英語でグラス・ルーツ、すなわち「草の根」と呼ぶ）となったが、子供達には敗者復活戦のチャンスを与えてやりたいというのが彼らの心からなる切なる願いだったのである。こうして、「負け組」となったグラス・ルーツ達は負け犬根性に落ち込むことなく、子供達の代での巻き返しを狙っているのである。こうして、「勝ち組」・成功者と「負け組」・グラス・ルーツの間には、階級格差が生じたが、成功への道をめぐる人生ゲー

ムの帰趨は未だついていないと私の家へ押しかけてきた30代の男達は考えているのである。ここには未だニューギニア高地の新石器の部族文化の中に生きる、競争的平等主義のエートスが生々と脈打っているのである。それが成功者達の企てるカウベナ中学の建設より、アンブル村の「我らの学校」であると彼らの言うアンブル・エレメンタリー・スクールの建設を、と訴えさせている精神的動機なのである。こうして、メケやアイエが地域に「発展」をもたらす、公共事業であるという中学校建設はアンブル村の「負け組」グラス・ルーツからは自分達からは疎遠な事業であり、決して彼らのための事業ではないと否定されるのである。こうして、成功者達のヘゲモニーはグラス・ルーツにより同意を獲得することに失敗したのである。そして、グラス・ルーツ達は教育の受益者自己負担原理を導入し、教育制度を改革して実質的な教育棄民政策を打ち出した、人民民主運動を与党とする現モロータ政権（2001年現在、2002年総選挙で政権交代した）に深い不信の念を抱いている。彼らの言い分によれば、「(中学校のような) 大きい学校は政府も見ることが出来る。だが、(村の小学校のような) 小さな学校は目に入らず後回しにされる」と言う⁽³⁾。しかも、モロータ政権の教育政策によれば、村の小学校で教える教科は現地語、共同体生活、衛生、算数、民芸であり、これは村人達を近代セクターではなく、伝統的村落に適応させることを明らかに指向している。村の小学校は成功への階段を全人口の80~85%を占める村落部族民に開放するものではなく、彼らを現状=敗者の状態に留め置くための装置なのであると彼らは認識している。村の小学校の校長マーティン・ヨコによれば、「制度改革は俺達の国には何も良いものとはならなかった。俺達はおんぼろ家屋の下で暮らすことを余儀なくされている」と言う⁽⁴⁾。彼らによれば、現政権は「勝ち組」と「負け組」を固定化しようとしているのである。それに対して、サイモンの弟で、呪殺された父アペの跡を継いだケベンゲは「俺達、村の人間は闘うことができる。俺達は抗議もできる。だが、俺達には権力が無い。というのも、俺達には俺達をバックアップしてくれる人間がいないからだ」と言う⁽⁵⁾。「だが」とマーティン・ヨコは言う。「来年（2002年）には選挙

がある。俺達は人民民主運動党を落としてやる。連中は俺達の人生を壊してしまったからだ」⁽⁶⁾。彼がこのように言う時、IMFに指導されたモロータ政権の国営企業（パプアニューギニア銀行公社、国営航空エア・ニューギニー、電力公社、通信郵便公社、水道公社など）の民営化や教育の受益者自己負担原理の導入を始めとする弱肉強食の市場経済化の強行とそれに抗議した大学生への警官隊の銃撃を念頭に置いている。これら国営企業を買収できるだけの資本は外国企業にしかないから、こうした民営化はパプアニューギニア（「俺達の」）資産を外国人の手に奪われ、外国人によって自分達の生活がコントロールされてしまうだけだというナショナリスティックな危機感がマーティンをはじめ、その場にいた者達が皆、民営化に反対する動機となっている。私が「だが、政府はPUT（People's Unit Trust: 人民単位信託）という制度を設けていて、パプアニューギニア国民に株式を優先的に取得させるらしいぞ」と言うと、皆は「そんな株を買えるのは金持ちだけだ。俺達、コーヒーの金しか手に入らん村のグラス・ルーツには縁のない話だ」⁽⁷⁾と一蹴するのであった。

このように、村人の大半を占める「負け組」の目にはモロータ政権の市場経済化政策は成功者とグラス・ルーツ、「勝ち組」と「負け組」の区別を固定化し、「負け組」に新たな人生ゲームへの参入を阻む障壁としか映っていないのである。そして、こうした経験を経て、グラス・ルーツの階級意識が育ちつつあるのである。

第6節 人口爆発、村落の困窮、村のスラム化

先にも述べたように、インボング族を含む南高地州は年率5%という恐るべき勢いで人口爆発を続け、アンブル村はわずか15年の間に人口は倍増した。人口800人の村は更に増加を続け、村の小学校には毎年30人ずつの子供達が入学している。1000人を突破する日も遠くはないであろう。あと、5年か10年で村は激しい土地不足に直面するだろうと村人達は言う⁽⁸⁾。

その最初の徴候がブッシュ（一次林、インボンク語ではガマ）の消滅である。私が最初にアンブル村の調査を始めた1985～87年当時には、ちょっとした傾斜地はブッシュに覆われ、少年達の遊び場になるとともにブッシュに生えている木やその枝は誰もが伐り取ることができた。

木で柱を建て、ケンゲルと呼ばれる葦を叩いて織り合わせた筵で壁や床とし、茅で屋根をふくインボンク族の伝統的な家屋の建設にとってブッシュの木は必要不可欠な材料であった。その建材の源が消失したのである。インボンク伝統のそうしたアンギ・ウゲ（葦の家）は2～3年で雨漏りするなどして老朽化し、立て替えねばならない。その材料源となるブッシュが消滅したのである。これが第一の問題。そして、第二に、インボンク族の燃料は薪である。その薪はブッシュの木の枝を伐り払ったり、木の幹を切り倒して割って作り出す。そして、家の中心にある炉にくべて、主食であるサツマイモを焼き、同時に夜間の暖をとる（アンブル村は標高1400メートル。夜は気温10度まで下がる）。その燃料、唯一のエネルギー源である薪の供給源であるブッシュがなくなったのである。これもまた由々しき事態であった。ただ、薪は未だ家屋の周りに植えているカリベ（針葉樹の一種）など木の枝を伐って凌いでいるが。

こうした窮状を打開すべく、アンブル村の村人達はコーヒー豆を売って得た金やピーナツやバナナやキュウリなどを路上で行き交うドライバーや旅人達に売って得た金を貯めて、材木やトタンや釘を買って、耐久性のあるパーマネント・ハウスを建てようと鋸を削っている。材木で作ったパーマネント・ハウスといっても、成功者達のバンガロー風のモダンな家ではなく、ポート・モレスビーのスラムで見られるような粗末な家であるが、少なくとも伝統的なアンギ・ウゲと違って10～20年は住まうことができる。そして、実際アンブル村ではそうした都市のスラムのような家が次々と建ち始めている。村の相貌は急速に変わりつつある。かつての伝統的なアンギ・ウゲは少なくなり、都市のスラムの家のような家が目立つようになった。粗末な家ではあるが、それでもそうした家を建てるには1000～1500キナを要する。コーヒー

栽培世帯のコーヒー売上高の3～5年分である。そして、それに伴って、村人達の間関係の間に貨幣経済の原理が浸透し始めたのである。家を建てる時は勿論、畑を耕したり、家の敷地内に川の小石を集めて小道を敷いたりする時にも、人々は労働の対価として貨幣を要求するようになった。かつては、家作や畑の開墾といった大人数を要する仕事を始める者は、親族（サブ・クラン・レベル）や隣人に声をかけて米を炊き、サツマイモを焼き、冷凍羊肉を焼いて、食事をふるまえば、皆快く手伝っていたのだが、今はそうした互助慣行は失われ、人々は他人のために働く際には必ず貨幣を要求するようになった。エンバの次弟でウィンディ兄弟中、ただ一人村に残ったモティ・ウィンディはアンブブルを含むカリリポイ地域一帯、更に上手のモカゴモイエ部族に至るまで、まるでシティのようだという。シティがアンブブルにまで押し寄せてきたのだと⁹⁾。人と人との関係が貨幣によって媒される都市の生活原理がアンブブルを始めとする村々にまで浸透してきたのである。こうして、インボン族の人口爆発は人間関係の質を変え、景観だけでなく、社会の内実をも都市（のスラム）化させたのである。

ブッシュを消滅させた元凶はむろん、拡大した家族を養うため、一次林を伐り拓いて畑にしたせいであるが、それでもまだ土地は足りず、休閒地の草原（インボン族は焼畑耕作民である）を畑にしたり、父親達が植えつけたコーヒー園を畑に転換して、村人達は凌いでいる。だが、休閒地の耕作は地味を劣化させ、コーヒー園の畑への転換は村人達から主要な現金収入源を奪ってしまう。ただでさえ、貨幣が日常生活を送る上で必要とされてきたのに、その貨幣の主要収入源が失われようとしているのである。就学期の子供達を持つ30代の男達が学校教育を受けさせようと血眼になっているのも、一つにはこうした村の生活の困窮が動機となっている。

そして、この人口爆発を解消し、アンブブル村の人間達が食べていくための方途として試みられているのが、コロパンギ・コーヒー・プランテーション再建計画なのである。

このコロパンギの70ヘクタールの土地を〈ナウリガイ〉ヤギリからアイエ

が遺言で寄贈され、2000年8月にアイエがプランテーションの土地を州政府から取り戻し、プランテーションを再建しようと八方奔走したことはすでに述べた。ところが、2001年8月に私がアンブル村を訪れた時にはアイエはプランテーション再建計画からすでに手を引いてしまっていた。それは、一つにはスタートしたばかりの卸売業に全力投球する必要があったこともあるが、もう一方ではプランテーション再建による村人達の嫉妬や疑心暗鬼を恐れたためにでもある。アイエの予想によれば、卸売とプランテーションを同時に経営してゆけば、村人達は「コーヒー・プランテーションの金をアイエは卸売に投入している」と言い始めるに違いない。「見ろや。卸売りは大きく、大きく、大きくなっていき、コーヒー・プランテーションは失敗してゆくばかりだ。アイエはビジネスマンだ。奴はずるいトリックを使ってコーヒーの金を卸売りの中に投入しとるんやろ」と思い始めるであろうとアイエは考えたのである⁽¹⁰⁾。

こうして、アイエはコーヒー・プランテーションから手を引いたのである。そして、アイエ一流の計算もその決断を裏打ちしていた。コーヒーの金が入れば、村人達は万屋での消費に使う。ということは、その万屋に商品を卸しているアイエも潤うに違いないということである。このような思惑と計算のもと、村の主立った者達(大小のイエノミ)に「コーヒー・プランテーションはあんた方がやれ。俺はもうええわ。俺は手を引く」と宣言したのである⁽¹¹⁾。

こうして、コロパンギ・プランテーション再建計画は性格を一変させることとなった。2000年段階では、コロパンギ・プランテーションはアイエがプランテーション代表に収まり、その下に12人の取締役が取締役会を構成するプライベート・ビジネス(私企業)として発足するはずだった。

ところが、そのビジネスの大黒柱となるべきアイエが突然手を引いたのである。アイエのビジネスの才覚あって初めて、コーヒー・プランテーションは私企業として成り立っていける。ところが、その肝腎要のアイエが抜けてしまったのである。

村の有力者達はコーヒー・プランテーションを州政府やインボン族地方

政治評議会（村長会議）を引き入れることによってパブリック・ビジネスとして再建する方針に変更した。プランテーション会社を経営していける能力を持つ人間が村にはいなかったためである。それゆえ、州政府を引き入れてプランテーション経営の経験のある州の農業技官を支配人（マネージャー）に据え、経営を委ねる必要があったのである。支配人である農業技官は州庁所在地メンディからプランテーションまでの片道2時間の道を毎日通勤し、コーヒー・プランテーション再開に必要なコーヒーの枝の剪定、除草、植え付けなどの指示を与え、それをアンブル村出身でイアリブ中学卒のテレマが副支配人（アシスタント・マネージャー）として40人のアンブル村の村人達を指揮・監督して遂行していく。村人達は朝8時から昼4時まで働いて月120キナ（4200円）の賃金を得る。これは1年の現金収入が500～600キナ程度の村人達にとってはきわめて大きな収入源である。プランテーション会社は株の25%を州政府が、25%を郡の村長会議が持ち、残る50%を地元の土地所有者達が持つことになった。こうして、州政府、郡の村長会議、地元住民から成る複雑な構造を持つ会社が設立されたのである。設立資金としては中央政府の農業省から20万キナ（7000万円）が支給された。これは設立当時、南高地州の行政長官としてモロータ首相から任命されていたピラ・ニンギの画策に応じて為されたものであった。この資金供与はクヌクンベ部族出身のピラがアンブル村を中心としたカリリポイ部族へ影響力の楔を打ち込むための政治的戦術として、モロータ首相率いる与党の人民民主運動（PDM）を動かして実現したものであったのである。

会社は1985年当時から、プランテーション返却のために奔走していたアンブル村の〈クリガイ〉氏族のカレ・ニケを社長に、カウリエング村のイエノミ、ポマノを副社長に据え、アンブル村の各氏族の代表者8人、そしてカリリポイ部族の各村からの代表者6人から成る取締役会を構成した。アンブル村以外からも取締役を選任したのは他村にも利益を配分して、他村の者達（とりわけ若者達）がコーヒー泥棒を行わないようにとの配慮からである（IMFの試算によれば、コーヒー・プランテーションのコーヒー生産量の約

50%がコーヒー泥棒によって盗まれている)。他村の取締役はメケ・プレヤパガ・キリ，カリリポイ部族の村落治安判事を長く務めたカビエプル村のイエノミ，〈テギ〉プンプの息子ティム・プンプ，カウリエング村のビジネスマン，ステープン・ティポら成功者達選ばれていることも見逃せない。ピラはコロパンギ・プランテーションへの20万キナの注入を通して成功者達やイエノミ層に利を食らわせたのである。

これら取締役達はそれぞれ銀行口座をつくり，プランテーションが収入をもたらすようになれば，各々の口座に配当金が払い込まれるシステムとなっている。そして，そうした配当金は各村や各氏族の成員が病気になったり，トラブルを起こして賠償金が必要になったり，子供を上級学校に進学させるための学費が必要になったりした時，引き出されることになっている。副支配人のテレマによれば，この会社はアイエらのビジネスとは異なり，公共ビジネスであり，人口爆発で過剰な人口と土地不足に直面しつつあるカリリポイ部族（とりわけ，アンブプル村）の危機を救うための方途なのである。

だが，このキメラの如き組織体は実際に競争の激しい市場経済の中で存立可能なのであろうか？ アイエが危惧を抱いたのもその点であった。テレマによれば，プランテーション会社が本格的に操業を始めるには政府からの更なる30万キナの資金投入が不可欠なので，会社はそれを待っているという。プランテーションを切り盛りしているテレマはピラが国会議員に選ばれていることによって，中央政府からの30万キナの追加贈与が行われることを期待している。こうした政府への強い依存心，そして組織の多頭性，更にビジネス組織であるとともに地域相互援助団体としての性格がコロパンギ・プランテーションの未来に暗い影を落としている。しかも，アンブプル村の村人達の多くはプランテーション再建計画にあまり熱心ではない。プランテーションを軌道に乗せようと奔走しているのは，事実上テレマ一人であるのが実態なのである。他の者達は言いつけられたことをこなすはするが，その姿勢は道路工事などの公共事業に臨時雇用された時の態度とほとんど変わることがなく，自分から主体的にプランテーションの再建の一翼を担おうとする姿勢

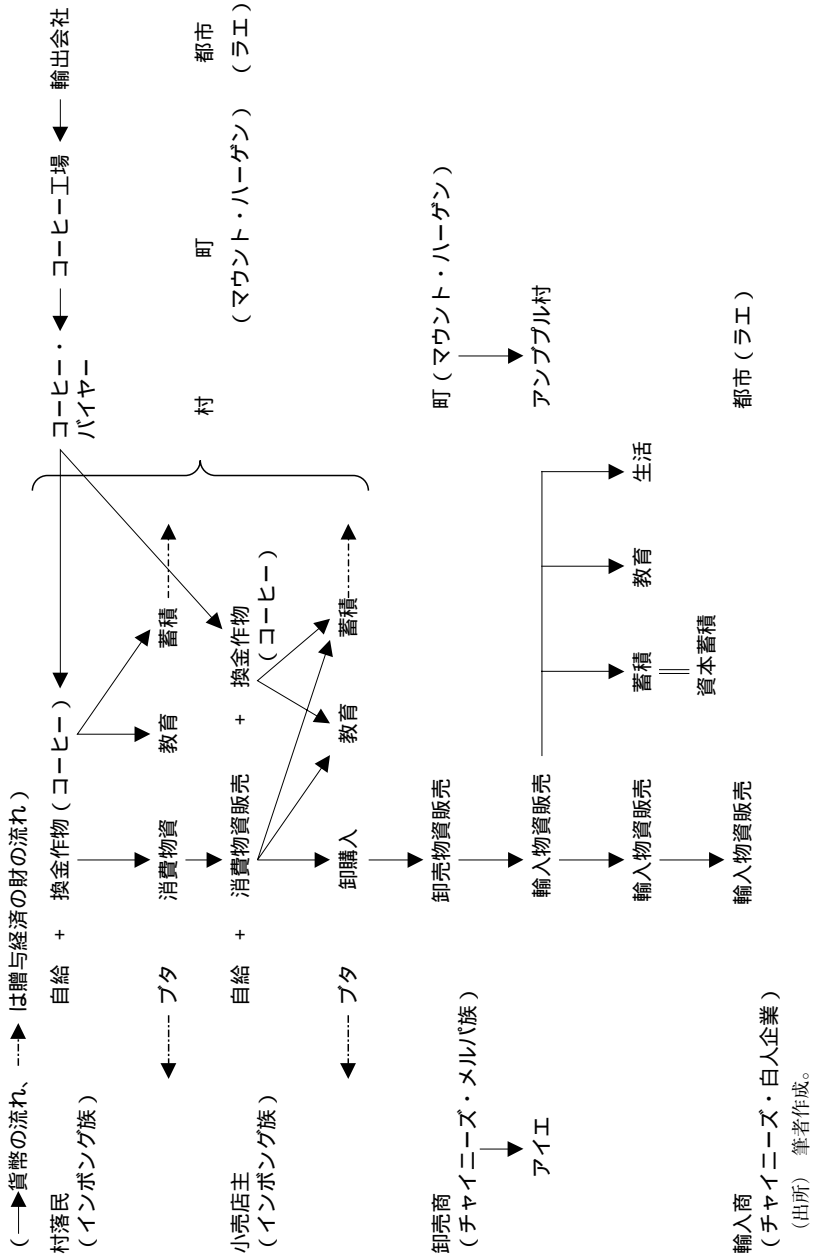
が全く欠落しているのである。すなわち、プランテーションで働いている村人達の大半にとって、それは新手の公共事業であり、取締役会を構成するイエノミや成功者達にとっては政府からの補助金の新たな水路（チャンネル）であるにすぎないのである。コロパング・プランテーションがアンブプル村の村人達やカリリポイ部族の有力者達の主体性をテレマのように喚起しない限り、その運命は州営時代と同じ政府からの補助金が途切れた瞬間、荒廃と放置の状態に立ち戻るであろう。ニューギニア高地の新石器的部族文化においては共同体的主体性の発露される瞬間は他共同体との戦争や他共同体に対する儀礼的贈与交換という共同体の外交・安全保障に関する文脈に限定されており、主体性の担い手は個々の戦士＝家長、すなわち伝統的人生ゲームの主人公なのであった。すなわち、インボング族の主体性のあり方は伝統的にきわめて個人主義的なのである。そして、新たな人生ゲームのもとで、インボング族の男達が望むのは協同組合的生産関係の形成ではなく、あくまでも新たな人生ゲームへの参入権、敗者復活戦の可能性を開放されたものとする事なのである。つまり、全員が平等になることではなく、全員が勝者、成功者になるチャンスを与えられることなのである。ここにインボング族の階級構造と主体性のあり方の大きな特徴がある。

第7節 インボング族における商品—貨幣経済のあり方

本節ではインボング族をめぐる財と貨幣の流れを概観しておこう。とは言っても、自給自足部門が未だ圧倒的比重を持つインボング族の財と貨幣の流れは決して複雑なものではない。ここでは一枚の「経済表」(図9)を用いて、その流れを表してみよう。

ローザ・ルクセンブルクはその名著『資本蓄積論』において、資本主義経済体制が自給経済の圧倒的な地域に浸透し、資本主義システムに組み込むに際して、まず商品経済（私達の言葉を用いれば商品—貨幣経済）を導入するも

図9 インボング族の財と貨幣をめぐる「経済表」



のであることを、第一次世界大戦以前の帝国主義経済を論ずる中で述べている（ルクセンブルク [2001: 131]）。彼女の命題は100年近くを経て、インボング族の21世紀にも妥当する。それはこの簡略な「経済表」からも読み取れようし（貨幣の流れに注目せよ）、また前節で描いた村落民同士の間を貨幣が媒介し、村落の中に商品—貨幣経済が浸透し始めていることから明らかである。しかも、更に注目すべきは、アイエにおいて資本主義の原理が村落社会の真只中に登場したことである。次節においては、アイエにおいて人格化されたインボング族の中における資本主義の誕生とその生態、および原理を詳細に見てゆこう。

第8節 ニューギニア高地の「資本論」

カール・マルクスはその主著『資本論』の「貨幣の資本への転化」と題する章の冒頭において「商品流通は資本の出発点である」と宣言した後に、商品流通に二つの形態を区別する。有名なW-G-W（商品—貨幣—商品）とG-W-G（貨幣—商品—貨幣）の区別である。最初の商品流通の形態、すなわちW-G-Wは商品流通の直接形態と呼ばれ、その目的は「買うために売ること」である（マルクス [1969: 255-256]）。我々の「経済表」の中では村落民がコーヒー豆を売り、手にした貨幣で米やサバ缶といった外国産の食品や鉄斧や山刀といった外国製の道具、そしてパーマネント・ハウスを建てるための建材やトタン板を買う行為がこれに相当する。それ以外の商品流通—貨幣流通の過程は規模の大小は異なれ、G-W-Gの過程である。この過程に参加する貨幣は、マルクスによれば、「資本に転化され、資本となる」。そして、この表においてはコーヒー工場におけるG-W-Gの過程を除いては、全てが商業資本である。こうした大小の商業資本は圧倒的多数の人口を占める村落民が必要とし、あるいは欲求する外国製ないしは外国産の、すなわち遠隔地の産物をリレー方式で村落民の手元に届けることによって、各々の利潤を得て

いる。岩井克人が商業資本主義の本質として指摘するように、遠く離れた地域の空間的差異を媒介することによって利潤を獲得するのである。ただし、小売商－卸売商－輸入商と村落民から離れ、手の届かない所へアクセスする者ほど、資本規模は拡大し、資本蓄積は増大し、近代的資本主義企業の性格が強くなっていく。村人達のすぐそばに位置する小売商（万屋）は資本規模も小さく、資本蓄積はほとんど行われぬ。これら小売商の得た利潤の蓄積は資本主義の流過程に入るよりも、むしろ伝統的な贈与と交換のサイクルの中に入っていくのである。真の意味での資本蓄積は卸売商から始まる。たとえば、アイエは毎週、4万キナ相当の商品をラエからアンブプルに運んでいき、4000キナ相当の利潤を上げ、次の投資に備えて銀行に貯蓄する。そして、ラエより更に遠隔の地オーストラリアや日本やシンガポールから商品をラエに持ち来る輸入商はアイエの利潤とは桁が1、2桁違う規模のビジネスを行っている。このように、最終消費者である村落民からの距離が遠くなるほど、資本規模も利潤も比例して拡大していくのである。

ところが、アイエの革新は村落地域の下真ん中に卸売屋を開き、輸送サービスを提供することにより、村と町との遠隔性を消滅させ、都市ラエからアンブプルへと途中の町マウント・ハーゲン skips して、新たな流通経路を創出することにより、町の卸売商達の手から顧客である小売商達を奪い取った点にあった。そのアイエによれば、「ビジネスにおいて、金は常に流れている」と言う。彼のビジネスに関して言えば、「4万から5万キナの金は常に回転している」¹²⁾。この貨幣を常に回転させることが、ビジネスの要諦なのである。

「価値の休みなき増大」を「より聡明なる資本家はこれを常につぎつぎに流通に投げ出すことによって達成する」(マルクス [1969: 267])。そして、この回転の無限運動の成否はG-W-Gの後半、W-G（商品の売り）にかかっている。「もし俺が会社の主で、お前が会社の主だとする。俺達は話をする。俺は6000キナ(21万円)分の小麦粉を持っていて、お前はパン工場の主だ。オーケー、月曜に俺は注文をとる。お前と話をつけて注文をとる。そうして、俺

達はランチを一緒にとり、商談をまとめる。その日に俺は電話をして6000キナ分の小麦粉を手配するのだ⁴³。こうしてアイエは小麦粉を無事に売り、6000キナを手にする。そして、パプアニューギニアにおいては会社の主と会社の主が会って話をつけるということが決定的に重要なのである。「もし俺がお前に会わなかったら、お前は俺に注文しないだろう。お前もビジネスの主、俺もビジネスの主。ビジネスマンとビジネスマンが決定的なのだ」。

W-G（商品の売り）を決するものは資本家と資本家の間の対面交渉にあるとアイエは力説する。

「俺の女房のルース（ラエの卸売店のマネージャー）も交渉する。だが、俺がその場にいるということが決定的なのだ」。

資本を所有する資本家であるビジネスマンと会社の経営・管理を行うだけのマネージャーでは重みが決定的に異なる。

「マネージャーは大した重みを持たないのだ。ボスマンが重みを持つのだ。俺自身がかかわったら、利益は上る。俺自身がかかわらなかつたら、もうけは下がる。マネージャーとビジネスマンでは商談は難しい。時には2000キナ（7万円）の注文を出してくれることもあるが、俺が行って顔と顔を合わせたら、1万キナの注文を相手は出してくれるのだ」。G-W-Gの運動において、W-Gの過程が成就されねば貨幣の資本への転化は失敗に帰したことになる。鍵となるのは運動の後半部W-Gの過程であり、パプアニューギニアの原初的資本主義においてそれを決定するのは資本家本人の交渉であるというのだ。W-G（商品の売り）という命懸けの跳躍を成功させるのは資本家本人以外には誰もいないのだと、アイエはくどいほどに力説する。

「時々、連中はつけて買う。だが、連中は支払いを長引かす。『ああ、金は今ないんだ』と言って、言い訳をして。マネージャーのルースが相手方のマネージャーに電話して、1万キナのつけの支払いを請求しても、連中は『今、金がないんだ。月曜にまた電話してくれるか』と言いおるわ。だが、俺が来たらどうなる？ お前は1万キナ借りがあるが、ルースが来ても『まあ、いや』と連中は考える。だが、俺が来たら、お前はどう思う？」

「払うだろうな」。

「さあ、お前が払う。そうすれば、俺は次のつけを与えてやる。お前はまず古いつけを払う。ビジネスマンとビジネスマンの間だ。簡単なことだ」。

「そして、お前は大金を毎日手に入れる」。

「そうだ」。

「いくらだ」。

「運のいい日は1万キナ（35万円）だ」。

『資本論』に引用されているマカロック氏が発見したように、「売るために買うことは投機であり、したがってまた投機と商業との差異はなくなる」（マルクス [1969: 262-263]）。そして、「ある一人が生産物を再び売るために買う一切の取引は事実上投機である」。アイエは言う。

「50万キナ（1750万円）の資産が俺にはある。だが、問題は現金（キャッシュ）だ。だから、俺はリスクを負う。ビジネスをリスクにかける。貯えた金を俺はリスクにかける。俺は金を資本に投資する。資本、資本、資本を俺は休みなく働かせる。そして、ビジネスは動いていくのだ」。

だから、1日、いや1時間が重要なのだとアイエは言う。

「それはほんとにしんどい。それは俺の心を毎日労する。それは本当に苦痛だ。ビジネスが壊れないようにするのは。だが、俺はこの仕事が好きなのだ」^[4]。

ここには資本主義の英雄時代を体現する一人の男の生気ほとばしる意識と生態が表明されている。

そして、アイエは明確な階級意識を「負け組」の村人達に対して抱いている。アイエは自分は半ば〈アペンダイ〉氏族の「遺伝子」（彼自身の表現）を持っているが、半ばはトロンベナ・プルノらと同じ〈ヌンプヌンプ〉氏族の「遺伝子」も伝えていると言う。それは父ウィンディ老人の母親は〈ヌンプヌンプ〉の女だったからである。同じことをメケ・ブレはより伝統的に「メメ・テンデクム」（血は一つ）と表現した。だが、アイエは現代的な「遺伝子」（gene）という言葉に固執する。そして、その「遺伝子」がアイエを筆頭と

するウィンディ兄弟をアンブル村の「負け組」グラスルーツから絶対的に区別するのである。アイエ自身の言葉を用いれば、「俺達キョウダイは〈ヌンプヌンプ〉の遺伝子を持っている。教育を受け、アンブル村の中では異なった、ユニークな一家なのだ」ということになる。アイエにおいて、階級意識は「遺伝子」という概念を介して結晶化する。そして、原因が「遺伝子」であるからには、階級関係は絶対的で不動のものとなるのである。

「遺伝子。神の祝福はそのようにしてある。それゆえ、アンブルでは男はすべて破滅してしまったのだ。誰一人として教育をうけとらん。その中で俺達はコミュニティの中で地位を占めておる。キョウダイも皆、学校へ行った。なぜなら、俺達は〈ヌンプヌンプ〉の系統だからだ」¹⁵。

アイエにおいて、階級分化は人々が時代の変化とそれに伴う人生ゲームの変化を読み取ってそれに適応した結果ではなく、神が予定して「遺伝子」を振り分けた結果である。神の意思を介在させたことにより、アイエの階級理論は救済予定説の現世版のようなものとなる。アイエの言葉には「神はその栄光を顕わさんとして、みずからの決断によりある人々……を永遠の生命に予定し (predestined), 他の人々を永遠の死滅に予定し給うた (foreordained)」(ヴェーバー [1989: 146]) という17世紀清教徒の恐るべき信仰告白の残響が聞こえてこないだろうか。

神の意思と「遺伝子」概念の思いもよらぬ結合！ これによって、アイエはインボング族固有の男達の間究極的平等の観念を乗り越え、自らの社会的成功を予め定められ、動かすこと能わぬ絶対的二極化の結果として冷徹に正当化することに成功したのである。

第9節 和解

2001年6月、総選挙を1年後に控えたある日、サイモン・アベはエンバ・ウィンディのモラタの家を訪ねた。サイモン・アベが銃を空に向けて発砲し、

ウィンディ兄弟を放逐した朝から、およそ9年の年月がたった。その間に、サイモン・アペの古着チェーンは没落し、ウィンディ兄弟のスコーン・ビジネスが興隆した後、兄弟は様々な人生の軌跡を歩んでいた。サイモン・アペは8万キナ(280万円)の負債を抱え、エンバもまた地主の借地料倍増によってパン工場をたたみ、今ではボラル・ガスの下請けをもらい、プロパン・ガスを缶詰めては得意先回りをして糊口を凌ぐ身となっていた。

サイモンは過去の過ちを詫び、エンバに翌年の総選挙にペアを組んで打って出ないかと申し出た。現国会議員のピーター・ペブルは兄弟を不正登用した科を問われ、議員身分を剥奪され、向こう3年は立候補できぬ身となっていた。「次の総選挙には再びピラが出てくるだろう。だが、我々が組めば十分勝ち目はある。僕が議員になれば、君を第一秘書にする。どうだ、過去の怨みは忘れて、手を組まないか」¹⁶。

エンバはラエに居るアイエに連絡を取り、二人はサイモンの提案について検討した。クヌクンベ部族の東半にしか地盤を持たないピラ・ニンギに対して、サイモンと手を組めば地元のカリリポイ部族はもとより、サイモンの故地クヌクンベ西半(〈プバイ〉〈オボガイ〉氏族対)、そしてウィンディ兄弟の氏族〈アペンダイ〉の本貫の地ブネノムイエ部族の支持を期待できる。勝算は少なく見積もっても9割。この勝負は打って出るに値すると二人は結論した。サイモンはパベットにすぎない。操るのは我々だ。

こうして、9年の歳月を経て、サイモン・アペとエンバ、アイエのウィンディ兄弟は和解に達したのだった。

早速、非公式の選挙運動が始まった。サイモンはバディリのオフィスを開放し、インボング族でポート・モレスビーに出て来ている者達を招き入れた。

エンバはバイブル・チャーチの信仰篤きキリスト教徒として敬意を払われ、その率直で意志の強い性格と類い稀な雄弁とオパングの能力でポート・モレスビーの教育エリートとグラスルーツの間から一目置かれる存在である。おまけに、エンバの父ウィンディ老人とエンバと同氏族〈アペンダイ〉出身のアンブル村の村落政治評議員カウンスル・クンピエはタンビ呪殺後、カリ

リポイ部族で最も威信と名声を博する指導者として尊敬を受けている。そして、選挙資金源としては異母兄弟のアイエが控えている。アイエはサイモンが当選したら、政官界に食い込み、公共事業を落札することができる。そうなれば、文字通り百万長者 (millionaire) だとアイエは言う¹⁷⁾。こうして、三人のチームは完成した。

このチームにラエにおけるアイエの隣人で、工務店を営むダニー・ケピとエンバの妻デビのおばを妻とする製材業主のルービン・カレが加わった。そして、公職濫用の科で国会議員の地位を剥奪され、与党人民民主運動党主メケレ・モロータとその壊刀であるピラ・ニンギに敵意を燃やすピーター・ペブルがサイモン—エンバ組に支持を与える動きに出た。

7月、パプアニューギニア大学学生自治会はモロータ政権の国営企業民営化に対する抗議運動を起こし、ポート・モレスビーのバス業者の支持を得て、ポート・モレスビーの失業者を大挙動員し、首相公邸を取り囲んだ。それに対し、モロータ首相は警官隊に銃撃を命じ、4人の大学生が命を落とした (*The National*, 03/07/2001)。このニュースはパプアニューギニア全土に反人民民主運動熱を巻き起こし、議会109議席中70議席以上を有していた人民民主運動からは議員の脱落が相次ぎ、議席数は40余議席に急落して、連立によってようやく政権を維持する有様となった (塩田 [2002: 11])。

こうした逆風に危機感を抱いたピラはサイモンに3万キナを与えるから立候補を取り止めるように申し出た。サイモンは笑ってその申し出を断った。

こうして、2001年8月には早くも選挙に10カ月先駆けて、サイモン対ピラの一騎打ちの構図が出来上がった。

第10節 総選挙と階級の政治学

モロータ首相は2001年5月、南高地州知事を公金横領の科を以って公権停止し、州政府運営のための特別行政官としてピラ・ニンギを州庁所在地メ

ンディに送り込んだ。ピラは在職2カ月足らずの間に次回総選挙に備えて、インボンク選挙区に集中豪雨的に公共投資を行った。すでに述べたコロバンギ・プランテーションへの20万キナの贈与を初めとして、テモーサイモン組が中途放棄していたリペノムーペアンベル道路開設工事に着手し、さらに荒廃化していたアンブプルーコモリ道路の修繕事業を10万キナ(350万円)で起こし、またイアリブ郡庁所在地には公衆電話を設置した。こうした矢継ぎ早の事業はピラの名声をインボンク族の間に高めるものであった。「ピラは仕事ができるぞ」と人々は語り合った。また、ピラは(とりわけカリリポイ部族の)イエノミ・成功者層に公職を与え、彼らに収入源をもたらした。こうして、ピラはサイモンの地盤に楔を打ち込んでいったのである。

タンビの次男テネはサイモンを説得して、立候補を見送るよう説得しようとした。テネは弁が立ち、太っ腹で、アンブプル村の若い衆の信望も厚い男である。そして、カウソル・クンビエの次のアンブプル村のイエノミはテネかエンバ、アイエのウィンディ兄弟であると目されている。テレマによれば、「エンバやアイエが村に居ればイエノミになれるが、二人はずっと町に出ていた。その間、ずっと村に残って村にトラブルが起ると、トラブルの解決に力を尽くしたのはテネだ」ということになる^⑧。テネはピラから公職を与えられ、ピラに恩義を負うことになり、兄弟同様の関係にあるサイモンに立候補を断念させようとしたのである。また、ピラはメケ・プレの病院のために救急車用のランド・クルーザーを与え、カウリエング村の村落政治評議員(村長)のステイーヴン・ティポにも公用の名目で新品のトヨタのトラックを与えた。

こうしたイエノミ・成功者層の取り込みを通じて、サイモンの地盤であるカリリポイ部族の票を吸い上げようとしたのである。だが、カリリポイのグラスルーツ達のサイモン支持の意志は固かった。それは一つには「俺達カリリポイからはまだ議員が出とらん。今度はカリリポイの番だ」という強い部族意識。もう一つには、ピラの人民民主運動の政策に対する強烈な反感があった。私が2001年8月に話した男達は皆、国営企業の民営化に反対であり、と

りわけ彼らの敗者復活戦を阻む教育の受益者自己負担原則の導入にあからさまな敵意を抱いていた。秘かなピラ・サポーターであるテレマですら、「もしピラが人民民主運動のチケットで立つなら、俺らは奴に投票できん。いかに奴が地域にええことをしても、人民民主運動のチケットの下では俺達はピラには投票できん。そやから、俺達はサイモンを待っとる。奴がやっ来て話をしたら、俺達カリリポイ地域の皆はサイモンを支持する。今度の選挙で一番勝ち目があるのはサイモンや」と言わざるを得ない情勢だったのである¹⁹。

一方、首都ポート・モレスビーではパプアニューギニア建国の父と呼ばれ、東セピック州選出議員にして、東セピック州知事である初代首相のサー・マイケル・ソマレはモロータ政権のIMF追随政策に反旗を翻し、パプアニューギニア国家は自らの意志で政策を決めるべしというナショナルリスティックな綱領のもとに、ナショナル・アライアンス（国民同盟）という政党を旗揚げした（塩田 [2002: 11]）。パプアニューギニアにおいて、最大の政治的カリスマをもつソマレ氏のもとに、多数の議員が参集し、国民同盟党はパプアニューギニア各地に支部を作っていた。こうして、事実上2002年6月の総選挙に向けて、選挙戦の火ぶたが切って落とされたのである。2002年総選挙は政権党人民民主運動vs.挑戦者国民同盟の一騎打ちとなる様相を呈していた。

サイモン－エンバ組も公認を求めて、国民運動に接触し、見事公認を勝ち取った。こうして、中央における人民民主運動vs.国民連合の対決の構図はインボング選挙区においてはピラvs.サイモンの対決として再現されたのである。

月日が経つにつれ、選挙キャンペーンははずみを加え、国民同盟に形勢が傾き、それにつれてサイモンはインボングの人々から「ホット・キャンディデット」（熱い候補者）と呼ばれるようになっていった。

情勢に危機を感じた人民民主運動は候補者達の突き上げによって一大方針転換を決断した。IMF官僚の「勧告」を蹴って、国民に最も不人気の教育の受益者自己負担政策を180度転換し、小中学生（12年間）の学費をただにするという政策を打ち出したのである（*Post-Courier*, 15-16/11/2001）。

ピラは早速インボングの地へ飛び、各コミュニティ・スクール（小学校高学年）を訪ねては、学校の維持運営費を集まった村人達の前で贈与する儀式を華々しく執った。ピラの隣にはピラの氏族対〈コレ〉〈ペライエ〉の同盟氏族対出身でこちらも教育大学を出て、文部次官を務めるコロワ・ボケヤの姿があった。これで息子や娘達に教育を与え、人生ゲームの敗者復活戦を行えると村の「負け組」の親達は希望を蘇らせた。こうして秤は再び、ピラの側に大きく傾いた。

ここで注目すべきことはまず、ピラが国の金をふんだんに使って、人心の収攬に用いていることである。たとえば、コロパンギ・プランテーションに20万キナ（700万円）を与えるなどという真似はサイモン—エンバ組の資金源であるアイエにもとてもできる業ではない。しかも、ピラはアンブブルー—コモリの道路修繕にも10万キナを与え、リペノム—ペアンベル道路の掘削工事にはそれをはるかに上回る金を与えたのである。すなわち、国家権力を手にしている人民民主運動が公共投資として投下できる額はいかに成功したビジネスマンといえども足元にも及ぶことのできない巨大さであるということだ。インボング族の「経済表」には書き込むことができなかつたが、インボングの地を流れる貨幣にはもう一つの大きな源があったのである。すなわち、公共投資として投下される国家の財政支出である。その巨大な資金はどこから来るのだろうか。4000人の従業員が勤めるブーゲンヴィル銅鉱山の生み出す富は1973～74財政年において2億6400万ドルに達するのに対し、同年に村落民250万人が産出した換金作物は1億5900万ドルにすぎなかつた。その後も、パプアニューギニアにおいては多国籍鉱物・エネルギー開発会社によって、オク・テディ金銅鉱山、ポーゲラ金銅鉱山、ミシマ金鉱、リヒール金鉱、更にはクトップ油田、ゴベ油田、ハイデス・ガス田などが次々と開発されていった。政府はそれら鉱山・油田・ガス田から税、鉱山使用料、株式配当金などの形で巨額の歳入を得ているのである。そして、その金を配分できるのは政権党とそれを構成する政治家達である。ピラがふんだんに公共支出の形で金をばらまいていくことができたのも、この鉱物・エネルギー資源からの歳入

を政権党人民民主運動が自由に処理し得るという事実から発するのである。

こうして、国際資本主義システムを村落に繋ぐ連節環として、政府は存在する。しかし、そこにおける貨幣の流れを左右する論理はインボング族の「経済表」およびニューギニア高地の「資本論」において我々が見出した論理とは性格を根本的に異にする。後者において、我々が見出した論理が流通過程において生じてくる資本、とりわけ商業資本の論理であったとするなら、前者において作動している論理は政治の論理である。とりわけ、学費無料化への転換に見られたように、国民の信託を得、自らの統治権（とりわけ予算分配権）に対する国民の同意を勝ち取るヘゲモニーの論理である。そして、そうした論理の差異から、この論理を実現する回路としての階級関係のあり方にも差異が生じてくる。資本家達がグラスルーツの欲望を実現するために、遠隔地との距離を媒介することによってグラスルーツの現金収入を搾取する存在であるとするなら、政治家達は国土において産出する全ての鉱物資源は国家の財産であると定めた鉱業法1977に基づいて、国際的鉱物・エネルギー資本に採掘権を与えることによって、国家による鉱物・エネルギー資源の独占的占有を富に変換する存在である。すなわち、彼らは政治的統治権を通じて、国内の巨大な鉱物・エネルギー資源を国際的資本主義システムに流通させることによって生まれてくる富の処分権を左右できる政治的階級を形成しているのである。その処分できる富の大きさはパプアニューギニア人資本家はもとより、鉱山・石油会社を除くいかなる外国人企業家も足元にも及ばない。ここに、彼らの資本家層に対する優位、ひいては統御の根拠があるのである。このような政治的統治階級の資本家階級に対する優位、もしくは統御という構図はカイザー時代のエンカー支配を想起させるものがある。無論、パプアニューギニアは議会制民主主義国家であり、ドイツの第二帝政とはただちに同日には論じられないが、政治的階級の経済的階級に対する優位という構図はパプアニューギニアに特異なものではないということは語り得るであろう。

モティによれば、ピラには警官達が付き添い、彼の出身氏族対〈コレ〉〈ベ

ライエ)のグラスルーツですら、ピラに会おうと近づいていけば、警官達によって追い払われるのだという。モティの妻で〈コレ〉〈ペライエ〉のイエノミ、〈コレ〉ヤロの娘であるルシーによれば、親族カテゴリー上はピラの父母に当たる者達ですら、銃を突きつけられ、容赦なく排除されるのだという。そして、ピラが移動する時はピラの車を警官の車が前後からはさんで警護するというのである。〈コレ〉ヤロほどのクヌクンベ随一の実力者ですら、ピラに会いに行く時はあらかじめ伝言を伝え、ピラの家の中の所でガードマンにピラへの来意を伝えて、やっとピラの家の中に招き入れられるのだ。グラスルーツが政府(ガヴマン)のピックマンに会うことはそれほど難しいのだとモティは言う²⁰⁾。

政治的統治階級は伝統的親族紐帯を超えた差別の論理を国民の大半を占めるグラスルーツに対して貫徹するのである。根源的平等の論理が支配していた伝統的インボング族の常識に慣れていた私には想像を絶する事態が生まれていたのである。

内面では、グラスルーツに絶対的差別観を抱いているアイエですら、村では同じ村人同士としてグラスルーツとつきあう。

ここにも、政治的統治階級と経済的成功者階級の懸隔が窺える。ただし、ピラはアイエやエンバ、またメケ・プレやテネ・タンビ、〈コレ〉〈ペライエ〉の本貫の地ペアンベルの村落政治評議員(村長)でコーヒー・バイヤー兼養鶏・養豚にたずさわるレピ・コヤイエら経済的成功者階級に対してはフランクにつきあう。それどころか、メケ・プレには病院の救急車用にとランドクルーザーを与えたり、テネには公職に任じて月1000キナ(3万5000円)の定取をもたらしたりしている。彼ら、新興成功者層が村々でかつての伝統的なイエノミに代わって影響力を持ち始めたことがその一因、そして中等教育を了え、英語も自由に操れる彼らとは文化的背景を共にしているという意識が一面にある。しかし、議会制民主主義を政体とするパプアニューギニアにおいては、マスとしてのグラスルーツが政治的統治階級の浮沈を最終的に握っているということをピラをもその有力な一員とする政権党人民民主運動は思

い知った。ただ、公共事業を持って来て、金をばらまくだけではグラスルーツは支持を与えないということ。そして、彼らグラスルーツが心から切望していることは、教育を通じて子女を新たな人生ゲームに参入させるチャンスを与えることであるということ。

階級は確かに形成された。しかし、人生ゲームとしての階級競争に対する敗者復活戦を、一度は敗者となったグラスルーツは決して諦めてはいない。階級をめぐる競争は更に続く。

おわりに

我々の50年弱に及ぶインボング文明史に対する、階級形成という観点からする追究はひとまず、2002年2月の時点でその幕を閉じた。筆者はこの素材をもとに読者に対して、階級とは何か、そしてそれが生成する契機とは何であるのかについて自由に考察していただければ本章の役割は十分に果たされたと考えるものであり、蛇足となる恐れをなしとしないが、ニューギニア高地のインボング族の階級形成史の叙述を通じて、筆者の得た階級観を結論として呈示しておきたい。

「今日まであらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である」(マルクス=エンゲルス [1951: 33])。階級研究の歴史は、マルクスとエンゲルスの手になるこの輝かしい断定から始まった(もっとも、後にアメリカ人類学の先駆者ライス・ヘンリー・モーガンの著作の研究を行い、『家族・私有財産・国家の起源』を書き上げたエンゲルスは「歴史」を「書かれた歴史」へと訂正したが)。この命題をめぐる、ベルリンの壁崩壊から始まる社会主義体制の崩壊に至る、約1世紀半にわたる社会科学史上最も白熱した論争が繰り返されてきた。その最後の遺産相続者がフランスの社会学・人類学者ピエール・ブルデューである。だが、20世紀の最後の10年間は社会主義への幻滅とともに、このテーマ自体の凋落をもたらしたように思われる。

だが、本章を読まれた読者は「階級」という概念が人類の文明史を省察する上でいかに実り豊かな概念であるか、少なくともその一端を垣間見られたことと信ずる（ただし、かつてのマルクス主義において見られたように、階級概念が神学的にドグマ化され、その柔軟性と生命力を失わない限りにおいてであるが）。

階級は人間諸個人の行為を動機付け、文明史を推進する原動力を社会に与えるのである。マルクスとエンゲルスの先の命題はその源を遠く、古代ギリシャの哲人ヘラクレイトスの宇宙観に発し、パトモスの聖ヨハネの『黙示録』と結びついて、西洋文明に流れ込んでいった。それは西洋文明の自己省察の近代における結実であった。

とりわけ、ニューギニア高地のように、競争的平等主義のエトスが支配する社会においては階級上昇へのチャンスは人々の間の競争を一層熾烈なものとし、人々の心的エネルギーを発動し、社会の転形（transformation）を加速化させる方向へと働く。その社会の転形とは新石器的部族社会から原初的資本主義社会への転形であり、その転形を方向を逸早く見て取った先行者が「勝ち組」成功者となり、従来通りの人生ゲームが進行するものと考え、遅れをとった者達が「負け組」グラスルーツとなって、モティの言葉を用いれば、「溝に落ち込んでしまった」のである⁽²⁾。このようにして、社会レベルで階級分解として現象するものは個人レベルでは人生ゲームの勝敗として人々一人一人によって体験されるのである。具体的には、できうる限り多くの妻を娶り、姻族ネットワークを広げるとともに、彼女らの労働によって財産の形態であるブタを多く飼育し、それらのブタをマガリ（生きたブタの贈与儀礼）やブタ屠殺祭に投入することにより、他共同体の有力者との間にパートナーシップを創り出し、威信・名声を獲得することによって村落共同体の指導者（イエノミ）になるという伝統的人生ゲームから、中学校プラスアルファの教育を受けて何らかの形のビジネスを起こし、その中で競争に勝って資本家として資本を蓄積し、かつての白人プランターや宣教師が享受していた中産階級のライフスタイルを享受するという近代的人生ゲームへの、人生を舞台とし、人生を賭けたゲームへの転換である。財産の形態は家畜（ブタ）から

貨幣と建物や車や商品ストックからなる資本へと変態を遂げた。

だが、勝ち組ビジネス階級と負け組グラスルーツ階級の関係はマルクス主義の公式的階級関係の定義——「生産手段の所有関係に基づく搾取関係」——には妥当しない。負け組グラスルーツは人口爆発で狭小になったとは言え、未だ食料を自給自足できるだけの土地を持ち、生産関係においてビジネス階級に従属している者はごく少数である。土地の部族保有制度はIMF官僚のモロタ政権に対する執拗な「勧告」にもかかわらず、国民の激しい反対に遭って廃止されることなく存続している。土地の部族保有こそは部族制度の根幹を成すものであり、部族地の売買の禁止規定は部族的社会構造を支える柱石なのである。フリードリッヒ・エンゲルスが鋭くも見抜いたように、「新しい土地占有者が氏族と部族との上級所有権という桎梏を最終的にふりきったとき、この土地占有者はそれまで自分を土地に結びつけていた紐帯をもまた引きちぎ」（エンゲルス [1990: 275]）ることになるからである。逆に言うなら、土地の部族保有制度は村落成員間の紐帯を貨幣関係の浸透度にもかかわらず維持し、氏族や部族の解体を防いでいるということになる。こうして、男達の「勝ち組」と「負け組」への分化にもかかわらず、地縁的には村落、親族的には氏族を単位とする部族的社会構造の枠組みは依然として維持されているのである。第一、国家権力の弱いパプアニューギニアにおいては、未だ安全保障の単位、ひいては諸個人のアイデンティティの拠り所は村落や氏族にあり、何らかのトラブルが起こった場合は、村落を核とする部族的同盟関係が作動を始め、ブタと貨幣を集めて賠償（コンペンセーション）を行うことによって、トラブルの解決を図る。そこには、国家の介入する余地は全くない。

こうした、安全保障という人の生命と財産の根底に横たわる問題が部族的解決メカニズムに依存している限り、成功者ビジネス階級も部族的社会構造に同化する以外にない。部族的解決メカニズムという支えを失えば、彼らが築き上げた資本を保護する機構はどこにもないからである。こうして、「勝ち組」ビジネス階級はメケ・プレヤスティーブン・ティポヤレピ・コヤイエ

らのように、村落政治評議員（村長）という役職を得ることにより、かつてのイエノミの後継者となり、その地位を通じてリーダーシップを発揮しようとする道を選ぶのである。こうして、インボンゴの「勝ち組」ビジネス階級は近代的資本主義と部族的政治関係という二重の体系を生きる双面神ヤヌスの如き両義的存在となるのである。そうすることによって初めて、彼らはインボンゴの地において指導者階級となり得るのである。

この二重の体系に対して、更に第三の要素としてキリスト教が加わる時、成功者ビジネス階級は自身のリーダーシップに対する新たな倫理的正当性を獲得する。一般に、インボンゴ族においてはグラスルーツよりも、成功者ビジネス階級に熱心なキリスト教徒の比率が高いが、日曜に教会に出かけて礼拝をせず、トランプ博打に興じているグラスルーツも概ねキリスト教の神の存在を信じ、神に対する恐れを抱いている。それゆえ、機会が訪れれば、発作的宗教運動（とりわけ終末論的運動）が起こり、村々を席卷する。ただし、数カ月経って最後の審判の恐れが去れば、多くの者は再び日常生活に復帰するのだが。

こうした下地の上に敬虔な成功者ビジネス階級の者達は自分達のリーダーシップを聖書、ことに『旧約聖書』の預言者や士師に求め、旧約的社会像をモデルにした社会を創り上げることを理想とする。サイモン・アペを支持するルーベン・カレは潤沢な予算分配を投じて支持を獲得しようとする政治的統治階級の一員ピラ・ニンギを批判して、「父なる神はダビデを好み給い、指導者に為し給うた。ダビデは一介の羊飼いにすぎなかった。だが、彼は指導者になる資質を持っていた。それだけだった。今や、現政権のもとで国の経済は破綻の淵に立っている。我々は誰が指導者の資質を持っているかを見抜かねばならない」と言う²²。サイモンの副官を務めるエンバは、セピック地方の伝統的精霊家屋をモデルとしてデザインされた国会議事堂を「サタンの家」と呼び、政治的腐敗、経済的破綻、社会的崩壊の原因だとすら断ずる²³。こうした宗教的・倫理的優越を内面的支えにして、敬虔な成功者ビジネス階級は自らのグラスルーツに対する指導権の根拠とする。敬虔派成功者ビジネ

ス階級の政治的階級意識はサイモンの次の言葉に如実に表される。

「我々、教育を受けた人間は力を合わせて働かねばならない。そこが肝要だ。教育こそが真の解決の道だ。我々はあり方を変えねばならない。我々はまず何よりも民の面倒を見なければならない」²⁴⁾。

ここに表されているのは単に人生の成功者であるばかりでなく、倫理的にもグラスルーツに優越していると自らを見なす敬虔派ビジネス階級の護民官的指導者意識である。彼らは人生ゲームに勝ったのみではなく、内面的にもグラスルーツより優れていると思念しているのである。それゆえ、彼らは神からグラスルーツを保護してゆく責務を与えられたと考えているのである。

そして、彼らの描く理念的社会像はグラスルーツにも適度な教育を与え、インボングの地で小さなビジネスを行うよう指導し、グラスルーツの力の及ばぬ集積・加工・外国への出荷等といった中心的役割は自分達が行うというものである。

再び、マルクスの定式に戻るなら、グラスルーツのW-G-W（商品－貨幣－商品）という過程を活性化させ、それを自分達のG-W-G（貨幣－商品－貨幣）という貨幣の資本転化過程の拡大の点火装置とするという構想である。

IMF官僚に導かれたモロータ政権の部族的土地保有制度を廃棄し、伝統的部族構造を解体して、一気に市場経済原理をパプアニューギニア人の行動原理としようとする性急な資本主義化政策とは異なるが、彼らの構想も伝統的部族構造は維持しながら、グラスルーツの商品－貨幣経済への関与を深めることによって、成功者ビジネス階級の資本主義的基盤を広げ、深化させようという点で資本主義へ至る道の代替案を示していると言えよう。

そこにおいては、成功者ビジネス階級のグラスルーツに対する優越は維持される。こうして、サイモン－エンバ組の構想においても、グラスルーツは従属者・被保護者の位置に留めおかれ、グラスルーツの望む同じスタートラインに立った人生ゲームの敗者復活戦という願望は否定されるのである。

だが、伝統的社会構造の枠組みに深くとらえられているグラスルーツには部族を超えた団結とあるべき新しい社会の構想がない。彼らが望むのは自分

達も新たな人生ゲームに参加し、自分達も成功者ビジネス階級の一員となることなのである。成功者ビジネス階級が部族の境界を超えた集合的主体性を持っているのに対し、グラスルーツは成功者ビジネス階級に対する残余カテゴリーでしかない。彼らの階級性は主体的なものではなく、成功者ビジネス階級の勃興から出遅れた「立場」としての階級性にすぎないのである。彼らは個々に勝ち組の中にはい上がろうとは指向するが、勝ち組対負け組の構図自体を打破する意図はない。それゆえ、彼らには階級利害と階級意識に基づく階級としてのヴィジョンと構想が欠けている。ここに、成功者ビジネス階級の能動性・指導性とグラスルーツ階級の受動性・被指導性の対照が生じてくる所以がある。グラスルーツは人口の圧倒的多数を占めながらも、一握りの成功者ビジネス階級や政治的統治階級の代表者のいずれかを選択することしかできないのだ。

実は、階級と一括して名付けてきた成功者ビジネス階級とグラスルーツ階級の間には「主体としての階級」と「立場としての階級」という差異が隠されていたのである。そして、文明史を推展させていくのは、言うまでもなく、「主体としての階級」としての成功者ビジネス階級である。彼らは言わば新たな社会システム形成の運動体であると言えよう。

〔注〕

- (1) パプアニューギニアの通貨であるキナは1975～85年までは1キナ300円程度と高いレートを保っていたが、1985年のプラザ合意の後対円レートは低下し、経済状況の悪化から1990年代前半には対米ドル1キナとなっていたが、1994年10月の変動相場制への移行以降、急速に価値を低落させ、2002年8月現在では1キナ30円となっている。
- (2) 2000年8月、ワグメ村におけるMogoi Ogaiey老人へのインタビュー。
- (3) 2001年8月、アンブル村におけるKebenge Apeへのインタビュー。
- (4) 2001年8月、アンブル村におけるMartin Yokoへのインタビュー。
- (5) 2001年8月、アンブル村におけるKebenge Apeへのインタビュー。
- (6) 2001年8月、アンブル村におけるMartin Yokoへのインタビュー。
- (7) 2001年8月、アンブル村におけるMartin Yokoへのインタビュー。
- (8) 2001年8月、アンブル村におけるTerry Teremaへのインタビュー。

- (9) 2001年 8月, アンブプル村におけるMosbi Windiへのインタビュー。
- (10) 2001年 8月, アンブプル村におけるAiye Windiへのインタビュー。
- (11) 2001年 8月, アンブプル村におけるAiye Windiへのインタビュー。
- (12) 2001年 8月, アンブプル村におけるAiye Windiへのインタビュー。
- (13) 以下, 2001年 8月, アンブプル村におけるAiye Windiへのインタビュー。
- (14) 2001年 8月, アンブプル村におけるAiye Windiへのインタビュー。
- (15) 2001年 8月, アンブプル村におけるAiye Windiへのインタビュー。
- (16) 2001年 8月, ポートモレスビーにおけるSimon Apeへのインタビュー。
- (17) 2001年 8月, アンブプル村におけるAiye Windiへのインタビュー。
- (18) 2001年 8月, アンブプル村におけるTerry Teremaへのインタビュー。
- (19) 2001年 8月, アンブプル村におけるTerry Teremaへのインタビュー。
- (20) 2001年 8月, アンブプル村におけるMosbi Windiへのインタビュー。
- (21) 2001年 8月, アンブプル村におけるMosbi Windiへのインタビュー。
- (22) 2001年 8月, カラノ村におけるRueben Kareへのインタビュー。
- (23) 2001年 8月, ポートモレスビーにおけるEmba Windiへのインタビュー。
- (24) 2001年 8月, カラノ村におけるSimon Apeへのインタビュー。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

- ヴェーバー, マックス (大塚久雄訳) [1989] 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店。
- エンゲルス, フリードリッヒ (土屋保男訳) [1990] 『家族・私有財産・国家の起源』新日本出版社。
- キキ, A.M. (近藤正訳) [1978] 『キキ自伝—未開と文明のはざまで—』学生社。
- 塩田光喜 [1991] 「ウィンディ兄弟の生活と意見」(『共同生活と人間形成』第3・4合併号: 特集 若者組と民俗芸能, 41~60ページ)。
- [1994] 「2つの主権, 2種の法—ニューギニア高地における戦士共同体と国家—」(熊谷圭知・塩田光喜編『マタンギ・バシフィカー—太平洋島嶼諸国の政治・社会変動—』アジア経済研究所, 175~208ページ)。
- [1998] 「都市化とビジネス」(塩田光喜編『太平洋島嶼諸国の都市化』アジア経済研究所, 1~16ページ)。
- [2000] 「ビジネスと福音」(熊谷圭知・塩田光喜編『都市の誕生—太平洋島嶼諸国の都市化と社会変容—』アジア経済研究所, 85~156ページ)。
- [2002] 「危機に立つパプアニューギニアと21世紀の展望」(*South Pacific*,

No.249, 4~16ページ)。

シュムペーター, ヨーゼフ (塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳) [1977a,b] 『経済発展の理論 (上・下)』 岩波書店。

マタネ, P. (原もと子訳) [1976] 『我が少年時代のニューギニア』 学生社。

マルクス, カール (向坂逸郎訳) [1969] 『資本論 (一)』 岩波書店。

——=フリードリッヒ・エンゲルス (大内兵衛・向坂逸郎訳) [1951] 『共産党宣言』 岩波書店。

ルクセンブルク, ローザ (太田哲男訳) [2001] 『資本蓄積論』 同時代社。

〈外国語文献〉

Amarshi, A. [1979] “The Economy: The Development of Peripheral Capitalism,” A. Amarshi, K. Good and R. Mortimer, *Development and Dependency: The Political Economy of Papua New Guinea*, Melbourne: Oxford University Press, pp.3-62.

Downs, I. [1980] *The Australian Trusteeship Papua New Guinea 1945-75*, Canberra: Department of Home Affairs.

Gewartz, D. and K. Errington [1999] *Emerging Class in Papua New Guinea: The Telling of Difference*, Cambridge: Cambridge University Press.

Good, K. [1979] “The Class Structure,” A. Amarshi, K. Good and R. Mortimer, *Development and Dependency: The Political Economy of Papua New Guinea*, Melbourne: Oxford University Press, pp.97-162.

Gupta, D. [1985] “Education, Wages Policy and Social Stratification,” M. Bray and P. Smith eds., *Education and Social Stratification in Papua New Guinea*, Melbourne: Longman Cheshire Pty. Ltd., pp.67-75.

Jackson, D. [1981] *The Distribution of Incomes in Papua New Guinea*, Port Moresby: National Planning Office.

Latukefu, S. [1985] “The Modern Elite in Papua New Guinea,” M. Bray and P. Smith eds., *Education and Social Stratification in Papua New Guinea*, Melbourne: Longman Cheshire Pty. Ltd., pp.31-48.

Levantis, T. [2000] *Papua New Guinea: Employment, Wages and Economic Development*, Port Moresby: Institute of National Affairs.

Meek, V. L. [1982] *The University of Papua New Guinea: A Case Study in the Sociology of Higher Education*, St. Lucia: University of Queensland Press.

Mortimer, R. [1979] “The Political Forms of Dependency,” A. Amarshi, K. Good and R. Mortimer, *Development and Dependency: The Political Economy of Papua New Guinea*, Melbourne: Oxford University Press, pp.163-244.

National Statistical Office [2001] *Papua New Guinea 2000 CENSUS-Preliminary Figures*, Port Moresby: National Statistical Office.

- Pettman, J. [1984] "Schooling, Stratification and Resocialization in Papua New Guinea," R. J. May ed., *Social Stratification in Papua New Guinea*, Canberra: Australian National University, pp.133-151.
- Shiota, Mitsuki [1992] *Papua New Guinea at Turning Point*, Tokyo: Institute of Developing Economies.
- Smith, P. [1985] "Colonial Policy, Education and Sosial Stratification," M. Bray and P. Smith eds., *Education and Social Stratification in Papua New Guinea*, Melbourne: Longman Cheshire Pty. Ltd., pp.49-66.
- Somare, M. [1975] *Sana: An Autobiography of Michael Somare*, Port Moresby: Niugini Press Pty. Ltd.
- Wurm, S. A. ed. [1975] *Papuan Languages and the New Guinea Linguistic Scene*, New Guinea Area Languages and Language Study Vol.1, Canberra: Australian National University.
- ed. [1978] *Languages of the Highlands Province, Papua New Guinea*, Canberra: Australian National University.
- Young, R. E. [1973] *Education and Elitism in Papua New Guinea*, M. A. thesis, University of Papua New Guinea

〈定期刊行物〉

The National, 2000.1.4.

Papua New Guinea Post Courier, 2000.1.10 , 2001.1.17 , 2001.1.19 , 2001.1.25.